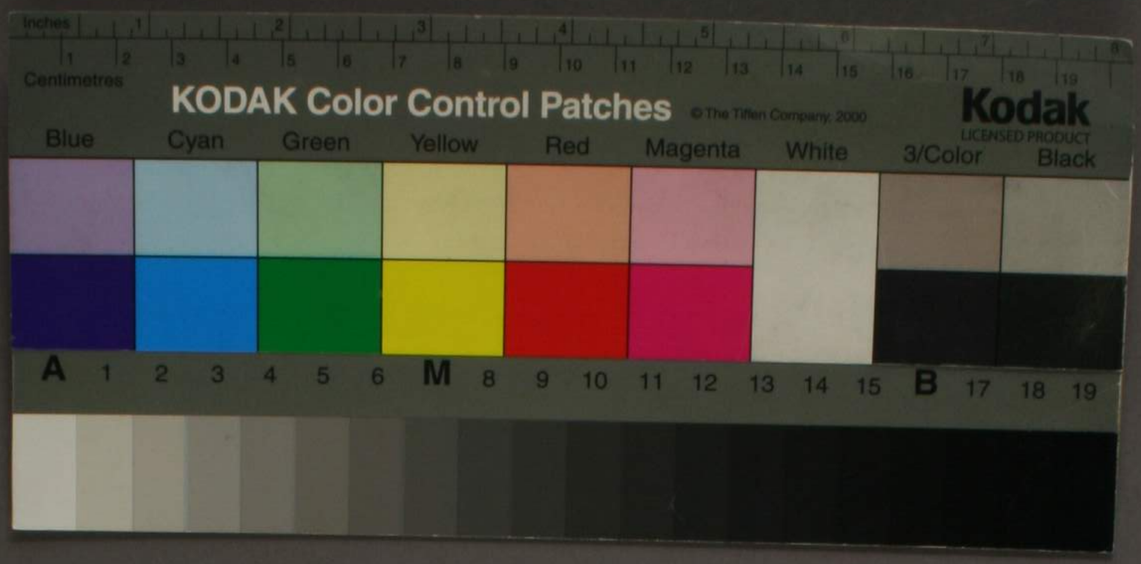

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

ル 3
3496
1

木綿園

光映文庫

ル3
3496
1

早稲田大学図書館
昭和35.1.28受入
藏書

中山前大納言愛親卿

凡例

一 東海道ハ京師よりたゞ先ヲ江戸ニ到ル都て十州ニ亘て其驛路を標せし名所古跡神社佛院を圖會とし驛ヲ圓圍ハ其下ニ署ス

一 海道ハ神社を延喜式神名帳ニ載るハ選んで記し鄕里ニ在ルハ生土神あり多くハ勸請の神祠なれど是ハ除く然ルとも大度ニ到ッてハ攝んで戴る寺院も亦これニ准し古刹を擇んで記し末派の墳寺道場の類ハ除限あらざれどもまた又省く大略畿内名所圖會ハ例ニ倣ふ

一 東海道より五里七里入るの地も亦名神名刹ハ其ニ舉る所謂尾州津嶌天王三州鳳來寺遠刃秋葉山相州大山寺江嶋鎌倉等なり餘ハ其ニ准ず

一 渾て方位を示すハ前位ニ循ふ其の東何里某の西何町ニ

あるを證し或ハ左の方右の方とハ京師より東関ニ赴く旅者の左右なり

一 引書ハ古來流布の紀り和歌ハ代々の撰集詩賦ハ名家の文集ハ引據とし軍談ハ其要を撮んで記し神廟梵刹の由緣を社人寺僧の記せるハ勘へ又村翁野夫の語も是なるハ載る事あり

一 世ニ鴨長明道之記同海道記といふ二書あり予是ハ校ふ事ハ長明ハ兼元五年十月十三日鎌倉ニ下向し將軍實朝公ニ謁し法華堂ニて懷舊の和歌ハ詠し事東鑑ニ見ル厥后又年を歷て建保四年六月八日春秋六十四葉にして卒す此事方丈記詞說ニ詳に録せり初の長明道之記ニ仁治三年八月十日京ハ出るとあり長明示寂の後廿六年を歷たり正しくあれハ多田滿仲五代孫從五位下伊賀守源光明の紀りハ和歌ハ其本集ニ入ッて光行と記せり扶桑拾葉ニハ此書ハ源親りと署次親行ハ光明の長子なるハ見周之此卷中ニ在しくて

光明紀行と記しなく長明と記さず又海道記にハ貞應二年卯月上旬
花洛を出立と書るとあれも長明入寂の後七年を歴し比訳鎌倉志にも
和歌ハ長明にしく詞ハ後人の贅する所なるへと書るを真に辞の風體黒
白にしてく長明にあらざる事明らかし長明ハ無名抄方丈記の二書
より外なし又兼好のほとゝ艸に長明四季物語を引て其頃の書ハ
亡びたるならん今世にある四季物語の二書ハ後人の准へ作れる偽書なり

一 いにしへより古人の紀行名地の圖画道中記の類殆多し猶ほども
海道除古今改ぬ舊書をとるに惑ふ事多し予巡行して今時の
見聞を記に猶脱漏ハ後人の補遺を俟のミ

一 画圖ハ京師江戸及び諸邦此書合書ハ故に画毎に姓名下章あり
細圖ハ浪速竹原春泉齊の一筆によりて姓名を記さず

東海道名所圖會卷之一

目録

平安城　洛東風景　三條橋　粟田
日罡　山科　四宮河原　小関越
追分　相阪山　走井　逢坂関
山迫両國堺　蟬丸祠　関寺小町趾　山神森
関清水　関明神祠　関小川　手向山
安喜寺 蓮如名駒石　世喜寺　顕證寺　大津
大津宮　練貫水　刃檀道　長等山
三井寺　新羅明神　三尾明神　護法善神　新宮権現　熱野権現
金堂　御井　梵鐘　食堂　大飼
唐院　護摩堂　三層塔　新山王　寶蔵　十八神
弁天祠　任吉祠　燈幢石壇　経蔵　教待仙人入定窟
圓満院御殿　安楽行堂　正法寺　福神石　大悲閣　近松寺
八幡樓　安然石塔　尾蔵寺　合尾八幡　微妙寺　水根寺
常在寺　早尾祠　亀丘　亀鳴橋　村雲橋　夜櫻
浄明水　二王門　三井十景　北院　中院　南院

光映文庫

智證大師傳 贈大友皇子傳
同御影銘
志賀都
志賀里
滋賀花園
志賀山越
滋賀浦
滋賀大輪田
志賀津
黒主祠
貫之祠
崇福廢寺
梵釋廢寺
明智光秀城趾
唐崎
辛崎神祠 山王系 神供
唐崎一ツ松
日吉山王神社大宮 楓武天皇御塔 春日祠 波上土濃 竹臺 濯眼水 竈殿
猿屋 哞字門 聖女祠 竈殿 蔦比祠
二ノ宮 攝社 三十六人 俳士圖 亀井
客人宮 影向石 橋社
十禪師宮 攝社 船石
聖真子宮 本地堂 橘樹 夢妙幢石 明星水
八王子宮 橋社
三宮 金岩
中七社
下七社
神祖御宮 讃佛堂 金鼓堂
楓武天皇御廟
慈眼大師廟
真葛原
四屋若宮
南若宮
登町若宮二社
奥成宮
磯成宮
比叡辻
若宮
石占井
同ノ祠
大鳥井
生源寺
妙見祠
大將軍祠
百枝祠
小五月會岡

歡喜石
和泰和行塚
大政所 宿院
王子宮 靈石
鼠祠
彼岸石
地藏堂
早尾社
走井大師堂
走井宮
猿塚
塔下惣社
八柳
滋賀院
榊宮
神路山
輕子宮
山王系圖
比叡山
四明嶽 冨士山遠景
西教寺
朱迎寺
苗麻神社
堅田浦
浮御堂
勾當内侍古蹟
大伴櫻
真聖入江
比良
打出濱
四宮社
精大明神祠
菊濱 玉造
大嘗會稲穂貢
松本渡口
義仲寺 義仲墳 芭蕉翁塚
芭蕉堂 丈艸塚 龍ヶ岡
膳所 吾孫君祠 陽岑清水
膳所 膳所町
陪膳濱
粟津野
粟津社
粟津里
粟津松原
兼平墳

雖練石補天鼇足立極清濁共化成浩劫浩劫
之外環八德大海浩劫之中生一大桑木延漫
數百里所稱奮鬯風土記適是也此墟曠茫而
無疆今有關以東到京坼數百里而有魁者有
奇者有淡者有秀者所稱籬島子圖繪迺是也
當與縮八荒於赤蹄閒纍因睫之中者諮賚不
當與躭金玉狗馬玩好而趨勢利者俱焉云

算山　熊谷尚之識

小朝拝

月清
後京極
拾芥抄云
兼明門
紫宸殿の
南面門
桂葉略記云
應和元年小野道風
殿上にて兼明門の
額を書次

草薙御劔と申奉ㇵ初の御名ハ天叢雲劔と申り 後世豈ハ仮瓊曲玉
八咫鏡草薙劔之三種神寶ㇵ列く皇孫ㇵ授給ひ永ㇵ璽と〻ㇵ
日本書紀曰 素盞烏尊出雲國簸川上ㇵ天降ま〻ㇵ時ㇵ哭聲ㇵ聞ゆ
あしき乙ㇵ老るま〻ㇵ者あり其中ㇵ老人のか女ㇵ至て撫く悲〻む
素盞烏尊向ま〻ㇵ汝達ㇵ誰ぞ又何のゆㇵ則ㇵ悲るぞと主婦答く我等ㇵ此
所の國神之名ㇵ脚摩乳妻ㇵ名ㇵ稲田姫と申る此ㇵ山中ㇵ八岐大蛇あり〻く往ㇵ吾兒ㇵを多く呑ま〻今又ま〻人
殘ま〻ㇵ少女も〻ㇵ呑ま〻んと乙ㇵ脱免ㇵ術ㇵ〻故ㇵ嘆ㇵ哀傷と申ㇵ
素盞烏も俱ㇵ歎たま〻ひ乃ㇵ老人ㇵ大蛇を殺ㇵ〻ㇵ給ㇵ〻ㇵ女を我妻ㇵ得させんや
老人大ㇵ喜ひ勅ㇵ随ひをん昇素盞烏尊稲田姫の湯ㇵの爪櫛ㇵ〻ㇵ
御髪ㇵ挿ま〻ㇵ婦人の槽ㇵ酒ㇵ盛く待る卑其期ㇵ至ま〻ㇵ山ㇵ震動し大蛇
現れ出ろ首尾ㇵ八岐あり眼ㇵ酸醤のㇵ〻し背ㇵ松柏生茂て八丘八谷の間ㇵ蔓
延く頭を上ㇶ八槽の酒を飲干酔町〻て眠る其時素盞烏所帯ゆ〻十握
劔ㇵ抜く大蛇をすㇺ〻ㇵ斬ゆ〻ㇵ尾ㇵ至く劔の刃ㇵ〻ㇵ缺ろ則其尾ㇵ裂く視
ゆ〻ㇵ一の劔あり大蛇の所居ろ上ㇵ常ㇵ村雲覆ㇵ〻し天叢雲劔と號ㇵ
其ㇵり此寶劔人代ㇵ傳ま〻神日本磐余彦天皇 神武帝 神代の蹤を継日向國
宮崎ㇵ都ㇵ〻ㇵ此時天下草昧ㇵ〻く封域いまだ定ㇵ〻故ㇵ寶劔をㇵ〻く
四海を治め初く帝東ㇵ大和國橿原宮ㇵ遷幸ま〻ㇵ廿二代 大足彦
忍代別天皇 景行帝 二十八年春二月朔日皇子日本武尊筑紫の叛賊熊襲ㇵ
一舉ㇵ滅ㇵ其國ㇵ平ㇵ〻ㇵ方ㇵ是九州院ㇵ治ろ百姓ㇵ悉ㇵ〻ㇵ服ㇵ〻ㇵ同帝紀四十年
夏六月東夷叛逆のㇵ〻ㇵ依奏次昇 天皇斧鉞を持く日本武尊ㇵ授け東國
安泰ㇵ〻べㇵ〻と詔あり〻ㇵ曰朕聞東夷ㇵ識性暴強あㇵ〻く凌犯ㇵ〻ㇵ〻ㇵ
邪神あり郊ㇵ妖鬼あり乃ㇵ街衢ㇵ遮ㇵ〻く人ㇵ〻ㇵ弊ㇵ〻む其賊徒の中ㇵ蝦夷
尤強ㇵ〻男女交ㇵ〻ㇵ父子の別ㇵ〻ㇵ冬ㇵ穴ㇵ宿ㇵ夏ㇵ巣ㇵ棲毛ㇵ衣ㇵ〻ㇵ血ㇵ飲ㇵ〻
昆弟相疑ㇵ山ㇵ登ㇵ〻ㇵ飛禽のㇵ〻く走獣のㇵ〻く草ㇵ隨ㇵ〻ㇵ追ㇵ
ㇵ〻ㇵ人民を略む古ㇵり已来いまだ王化ㇵ深ㇵ〻ㇵ今朕汝ㇵ〻ㇵ人ㇵ〻ㇵ身體

長大にして容姿端正なり力は鼎を扛る猛き事雷のごとし向ふ所敵なく攻る所必勝ずといふ事なし則知之體は吾子にして實は神人なりこれぞ寔に天朕が不穀を愍て國の不平なるを鎮謐して天業を經綸宗廟を不易ならしめんの命なりしん是天下は則汝が天下なり朕が位は則汝が位なり願は謀を深くし遠を慮て暴賊姦鬼を壊退べしと詔ありければ日本武尊斧鉞を授て再拜して奏して曰嘗て西戎を征せしの年天威を施し泰然襲を戮し其後決辰も經ずして東夷暴逆なり速に天神地祇を祀り　天皇の聖恩を世に弘め其境に臨み徳教を示して循服せざる者あらば忽兵を發してこれを誅罰し四海を鎮謐し叡慮を慰さん　天皇弟吉備武彦大伴武日連を日本武尊に從しめ七掬脛を膳夫として冬十月朔日威風凛々として出陣しまづ枉道て　伊勢皇太神宮を再拜し倭姫命に辭して曰今詔を被て東征し反賊を誅んと欲す於是倭姫命寶劔を授て慎て怠る事なかれと命じ給ふ日本武尊かくて駿河國に至る其地の姦賊陽從ひ尊を欺て曰

此郊に麋鹿多く氣は雲霧のごとく足は茂林のごとし出て獵し給へと奏す尊其言を信じ曠野に入て悠々然として覓獣し給ふ姦賊思ふ圖に将く桐圓の狼煙を上ければ伏勢一度に起て其野に放火し夫兵を鏖にせんとす尊驚破謀られぬと知めして佩せ給ふ藂雲の寶劔をとりてぬき草を薙攘ひ給ばたちまち風忽然として変じて賊軍へ吹靡き猛火熾になれば賊兵途を喪ひ炯に噎で倒れ死を風威いよいよ強して炎四方に満々たれば逆賊殘らず討れぬ於是草薙神劔と改め給ふ其地を燒津といふ左註末に見えたり　尊直に進んで相模國を越え上総に至り艤して海上を渡らせ給ふ暴風忽起て王船を覆さんとす尊の從者愛妾橘媛宣ふ今風つよくして濤浪鯨舟を沈んとす是は海神の祈禱の願ひ妾尊に贖て海に入尊の御身を穏かくせんと言訖て瀾の座に入給へば暴風忽止んで王船は着岸し給ふ故に時の人其海を馳水といふ尊是より上総より陸奥に入て蝦夷の魁帥を悉平げ給ひ凱陣の御時碓日嶺に至て東方を臨め給ひ三歎て吾嬬者やと宣ふ於是関の東をしんが吾嬬といひ風俗となりぬ此緣く

都のあんぐし祇園ワうの
長のかしら美頂の初花
咲そむかほうり地主の桜れ
雲と見へ雪とちるまで
貴様の旅ひ秀山の酣歌
蹴踘の菊れ春雙林乃
能囃子女伶の會下河
東の生花競楊弓の春
二軒茶屋の豆腐切る
春これみふ祇園の御神
とをぐしむ御神楽の
解りなかべし
東の水の清さなく
洗ひみがれ
美顔と粧ひ
美服と飾とひ
月花にうゝ
ゆゝも名あの

香煎所

香煎所
祇園

平山吉素鶴画

一種なかべし
れ至って
清れ時は
魚を取れ
東方先生
喟然と
しれ
のさまひ
しい
大ひなる
宅言
なりれ

主名劍の德に釋名曰劍は檢なり非常を防檢るの所以なり昔子胥桜ぞろふむ〳〵葛天盧の山を發く金玄出次虫左まんを得く劍を製次名玄劍鐶と
いく是劍の始く周官の桃氏劍を作る厥后楚ふ龍泉あり秦ふ太阿工布あり吳ふ
干將鏌耶あり越ふ純鈞湛盧真冢曹魚腸巨闕の諸劍あり漢ふ高廻の斬蛇
あり二尺を提く天下を取る魏ふ文帝の飛景流彩華鋒の二劍あり吉日て〳〵
天下の名器之我朝ふも小烏膝丸髭切鯰殊切ふ狐等あり和漢名劍を賞
して天下を治る事古今ふゆ〳〵き例あるなり〳〵
古今物名
花の色はうひとさうらこなんしも咲をくを落はをめけ内　なひかれ〳〵る
桓武天皇平安城を興基あり〳〵よう結縄の政をしく天下を化成し加之代々の
聖主德ふ踏仁を詠じ上古の風ふ同う〳〵く群生を撫育し多くば四海靜
み〳〵く億北の嵐を彌らんとをぶ見くふなる光度卿曙の記ふ延喜の帝半ふをそ
みおた例ふ申めんとなれもそ〳〵ぐくは匈奴殘ろうう〳〵古ふ多ふもろ〳〵
そう今関のそう〳〵戸ざ〳〵ひをれくそ大ゲ下卓錐の地もそそやうあ〳〵ぶと

いく事ふ〳〵蔡邕獨斷曰京師は天子の畿内千里日月を象る日月の躔次十里
あり毛詩曰文王都を豊ふ造る穫秦云燕の地方二ふ里帶甲數十萬こわが天府
國とて左思が都賦ふ金城の萬雉を建こ條の廣路ふ被さ十二の通門ふ立てう
杵平安京ふ都て一千有餘歳の都ふそ中ふも其例ふ〳〵く畿内七道ふ
天武帝の御時勅ふより定れ其中ふも東海道は冠着う草薙の劍光
煌々う〳〵く四海の潮ふ東日ふ照され渡のぞ名論ふ千丈の威日々ふ新ふ〳〵く
鳥取く翔ら〳〵ば賞罰嚴ふ〳〵く虎皮ふて公ふ次江府まで其往来貴賤と
ふく老ふ〳〵ふく老とふく書とふく公卿の勅を蒙りく車の御使蕭屋乃
諸侯ふ〳〵ふく〳〵ふく柔勁あるふ老人の交易斗藪の衆門風騒の歌統謙徳の
川御伊勢はいる富士指ぞ曙の餘は絶るまふく馬あり舟楽あり舟あり
橋あり泊〳〵ふく自在あり〳〵く渡旗あり〳〵ふ廻縄うり周禮曰國野の道十里に
一廬あり廬ふ飲食あり二十里ふ宿あり宿ふ驛亭あり亭ふ馬ふ鈴を掛ふ名を
驛路の鈴といふむり〳〵毎年貢と馬みく運び藏をり附文ふ公卿圀々乃任

あらて宇護ふ下ろの八時比鈴を打ろ馬か萩も関の戸を吟く通しけるよこゝろ

日本紀孝徳帝の御宇大化二年小関宿ハ定メ駅馬傳馬ハ鈴の契ハ有ニ至テ

あろ又續日本紀乃ゝ延暦廿四江家次第等ニ粗見へたり

勅使ハ

旅人の心語つゝろ夕旁ハ駅の鈴乃を也ひゝくなり　長能門人百

道細き里の駅け鈴森ハろろ雨ろ志の塚け駅の於れ小萩原ハ　宿家

神もさやろろ雨ろ志の塚け駅の於れ小萩原ハ　遠遠院

国王七鈴とり八ゝ七道へつゝろ玉ハ宮使ハ一つゝ賜ハゝれと今ハゝくむまや（ママ）

毎ふろろゝして宿ゝ其所を駅洛とゝ八駅舎ハ京師より江戸ハて五十三

駅之洛陽教業坊二條橋ハ東海道の喉口ゆゝくり祖もあれろ負馬荷ハ

橋上ろ洛東の風景ハ見渡せる本間ゝく神社佛閣烈ゝく苑落の勝景ふ

ゆゝ流る橋下の流ハ水上ハ鴨皇太神宮ゆゝふろ鴨川とゝ名産ハ硯石水

乾にして墨ゑハ艶あろ又月の淀ハ日々ハ雛を漁ゝく調貢ゝする至て美味之

艮ゆハ台嶺巍然ろゝく王城の鬼門を護ゆ悪魔ハ攘ゝ（ママ）禁ハ赤山禅定社

一条寺の陰り松石川ハ山の詩仙堂白川の瀧如意嶽浄土寺ハの大文字

月待ハの禁ゆハ銀閣寺ゆろ神楽岡吉田社ハ神祇官ハ齊場ゆゝく

日本の神々ハ鎮ハろ真南ハ真如堂黒谷西ハ百万遍東ハ永観堂あゝ鹿谷

談合谷松虫鈴虫の古墳光雲寺若王寺五山之上の南禅寺山腹ゆろ

駒の瀧山嶺を獨秀峯ろゝ二條橋上ろ南を眺ゆゝ美頂山知恩教院

吉山の山亭ゆゝ四時花之ハ跼蹐の省吾糸竹の妾會ハ院々ゆゝく遊

興ハ促次長楽寺東大谷雙林寺の西ハ方祇園女御の祠蹟

祇園社二軒茶屋赤蔽膝翩々ろゝくゝ豆腐切る若丁々ろゝ下河原の酥歌

の聲祇園町の待宵雲の鬢ばろ花の顔落花の散り花香筍句ハ筒井筒

いづくも共ハ杖ろゝれ紅葉の色ハ小町紅法風まゝゝく春繁茂ハ十乃

うゐねをゝ谷の柏子ようくゝゝんとゝ八綿奇妙ハ曙友ハ称る四条河原の

夕涼樽の酒茣蓙深惟子君の肌をゝれや一力里の見ゆる顕員銅芝居ハ里雲

花之倉縄ゝふ雨止地蔵尊建仁寺の陀羅尼の捨六波羅蜜寺ハ向ひ鐘

六道能化の地蔵菩薩・池菊渓菊水年王祠寺八柱乃
至一夜七観音小伽羅の像八坂の塔高蔓寺の姥捨幽艶な角萩
の名霊山の楼閣より洛陽の萬戸鮮之者部山西大谷三寧坂経書堂
仲光寺子安の観音車舎馬止光志れより清水寺小至る地主の権者羽
の滝青の水東清が九取青の方代有中山清閑寺とく九巻の冊帆要石
豊國山阿弥陀峯経信忠信の石塔三條社東公小松谷とく法然上人
旧蹟の洋刹あり是より若集滅道渋谷そく山科そく大津へ出る往還之
大佛殿と天正年中秀吉公の御建立あ〳〵く盧舎那佛代安〳〵楼門あ
二王の大像内ゟ金色の高麗狗あり古豊國の社小あり〳〵と経之南手石
塔婆あり世俗秀吉之古墳と云伝へ大銚へ南方田廊の外ふあり三十三間
堂公蓮寿王院といへ一千躰の観音仏安次堂余小衣浪水池の面の燕子花
濃紫の色鮮〳〵山前の更観へ渡堂ゟく大矢数あり諸侯の家臣おくに
集く射術を操を東小妙法院法親王の御殿あり目吉社菊横院菩源院

池田町ゟへ桃論〳〵のまわり明暗寺とい〻其南の柳園小松永貞徳居士
の遺蹟之新熊野往新熊野観音小参名高〳〵帝王皇妃の御陵も當山ふあり東福寺ゟ名京氏の菩提
所ゟ〳〵閑基ゟ聖一國師五山の其一之初ゟ地名ゟ月輪と号九條
関白兼實公の山荘之山ゟ月輪殿下と号次嫡孫大相國光明峯寺
道家公禅法ゟ帰〳〵ゟひ山地を聖一國師ふ寄附〳〵南都東大寺與福寺
と令く東福寺と号次通天橋の紅葉ゟ蜀錦の如し北殿司虎開の古仏
もと寺ふ住〳〵思固池の龍圓柄の庵朱等名所多〳〵三ツの峰稲荷社ゟ
元明帝和銅四年二月初午日出現〳〵ゟ〻延喜八年勅大政大臣名京時平
二条の社を修造次永享十年ふ社を山下今の地ふ移次南ふ流草ふ寶塔寺
石塔ゟの五百羅漢の石像極楽ゟの旧跡ふ昭宣公の古墳あり元政法師の経所
伏見の桃山ゟ和大路を北へ〳〵と五条橋ふ東院の古蹟羅ヶ嶋羅ヶ表ゟ
本願寺佛光寺の荒ヶ〳〵二条の橋上ゟ一眼ふ遮く寛平安京の佳景あり

平安城三條橋

東二條の森れ方
せきのこれ寅の刻
おぶんより吾妻下り
江戸出り伊勢
まつりの坂迄ひなど
日岡踏上の茶店に
集ひて酒莚を催
あるハ餞別留別の
詩歌を送るも
多かりた
旅立やうへ日の罡に
見送りて
まづ盃を
挙げ上ケ
由志よ

洛陽三條橋の東海道の筋なり〳〵く鴨川をわたりく向川橋あり東の方に青蓮院
の門跡粟田御殿金藏寺の三猿堂茶地藏粟田の皇子墓頂山の親鸞聖人
植髮の像あり抑墓頂と号するは法華經玄義に墓頂佛壁とみえたり
中華天台山の最高き山時に依て絶頂とあれども墓頂とあるは誤なり
なるべし將軍塚は墓頂の高嶺にありて天下に災害あるへき時を鳴動すと
小假治宗辺が水鏡に秀郷日山神明宮東岩倉大日山はこの土成墳〳〵く
陶器師あり古代粟田燒と賞じ上の清水は弘法大師の井筋なり吾妻にありて
関原與市を討く勇威を奮ひ日岡峠は本會上人あく藤をむそんぐ阪路
を平かしめその人車井は慈鎮和尚次郎が應千年松松坂ともいふ日暮
の阪ともいふ真如堂ありく 天智帝山野に御狩〳〵時忽然
〳〵く昇天あり御齋の落止る所は陵を建てり〳〵御廟道の儀ありゆきく
人駐奈地ろくく〳〵ある〳〵ふ〳〵〳〵車馬の往來多〳〵〳〵
十陵の第一と繁ふ八瀬の石あり天皇の御骸を焼ふ松林繁茂あり拾芥抄云
或云天智帝の御陵は薩州鹿兒島ふもとの御藏の内とふ
明王寺は陵村の小ふあり中尊十一面觀音慈覺大師の作と焼門小鏡の池
あり 天智帝昇天〳〵時玉體此池に沈給ふ〳〵とあり陵村植髮村を
〳〵く滋谷越あり 来迎大條橋へ出る下街道なり〳〵く滋谷越
と〳〵く〳〵中ふ十六ヶ村あり滋谷越
寺の旧跡栗栖野の旧村将軍塚大宅村
武雄蟄居の跡若山ふ大石ず斷舍石若山稲荷
の横東山寺滋谷小町寺等へ山道奴茶屋へ出内路傍ふあり
片岡甘云清とく射術の達人〳〵今ふ茶店ふ築鏃を救々飾る吉祥山安祥寺
山の山ふ立、町ふあり真言宗ふて高堂造立ふ
大師の開基なる毘沙門天王御寺勢ふ法親王住職〳〵ふ法華宗の檀林
あり護國寺とく〳〵末師妙傳寺ふ属次左ふ諸羽明神の廟〳〵あり三児産根
舍代多久乃諸葉とく〳〵楊柳と十禅寺ふ四宮村ふあり
本尊聖觀音を德太子の作といふ
訴ふ山陽宮と称次 仁明帝第四宮人康親王の棲ひ

淺ふ寺と〻ふ禅師を開祖と仰そんとう久〻しく荒廃せしを文和年中真慶法印と〻ふ人あつふ住職して人異相の通人なりしかふ并ふ素性を知る人稀なり　堂舎ら明正院上皇霊夢を感悦ありて明暦元年ふ再営ありて二尊の高閣成建ら且得月庵と号く則宿書の額あり上皇時々り幸海〻くて山水を愛し閣若ふ経冊石仮布く風葉より下るを見給ふ播州網干龍門寺の盤桂禅師中興し佛ハ淺陽成院の勅使ゝ竹が鼻地蔵菩薩ふ弘法大師の作ゝ四宮村迎地蔵ふ聖皇の作ありくいあり〻ら本幡里ふ今の六地蔵あり〻ふ平清盛ふ命せられ京師の迎ふ拵ふ建らるゝ　毎年七月廿四日六地蔵都鄙群集次第ふ市場あり

捨毛

あられもなくあれも哭ひろかをそうしをのやはゝかの袖そゝへまそ

小関跡　宮村ふ通ふ茶屋ふ〻ふ跡の名ありふ人の名ふ伝ふ村道幅の狭ふ人の多ふ往来ふ并寺ふ至る中途ふ峠あり此ふ東若尾ふ山田堂としてあり石老山念佛ふし男〻二并寺より長等山属ふ本るふ方八人余の山石ふ阿弥陀仏北五菩薩桃字ふ仏鏑を着證ふ仏の作ふしとそ其外文月ふ朱役り着不動ふる仏安仮当れふ京師清水氏霊夢ふより山ふより感得仏

〇京師より逗ふ迄ふ都名所圖會両編ふ著次ふて見ふ都路ふ入ふ

逗ふ

村の名ふ仮京師ふ大坂ふの別ふ通ふれの逗ふ通ふの標石あり柳緑花紅の文字ふ綺ふ右の方ふ山科若狭村　若狭川　井尾観若　白石明神　白石観世音　勧修寺ふ入ふ竜系ふ越ふ若の茶ふ小ふ宮ふ隨心院ふ小ふ小町化粧ふ水ふ一言寺ふ日所茶所ふ小栗栖の薮ふ地蔵ふ川ふ本幡里ふ入ふ禁長明方丈石平重衡塔明智光秀ふ亡所ふ山萬福寺宇治里宇治橋橋寺惣心院興正寺ふ堂観若朝日山喜撰ふ山麓亀石宇治橋平等院扇の芝鈎殿観若ふ茶師上林等の町ふ屋ふく久和街道慶聖勅田ふ出ふる裡納ふ奥ふ逗ふう伏見ふ三里ふ坂ふ十三里伏見より舟ふ共ふ船ふり

相坂ふ　逗ふより古ふ

逗拾

名ふ〻ふ相坂ふ

逢拾

わ坂の松れむ〻ふ立引袖ふそふちふ見ゆる月ふ駒ふ

金葉

わたもこう相坂ふの郭ふ明ふ行ふる夫ふ帰ふ之

詞花

わ坂の松ふる月のかうせいくきの駒ふいくく和ふ

新古

霧のふけしもいまこふ名ふ松の緑白ふ逢坂ふ山

新後拾

湖うみやくふより春ふあふ坂の山ふもみゆくふ風ふ吹

後撰拾

逢坂の山越そてふらむれふ寝ふはゝく君ふ此浦波

三条右大臣

良選法師

源定信

大江匡房

太上天皇

定家

法皇後撰拾

春泉齊

走井ふ
ちさとの
涌や
ちり紅葉
調夕
走井

逢阪山
関寺小町

四のみこうせ
あ間へふ
ほとめて
風ふくふ

家集
と郭よりハ
ゆかしれ文の
庭ハ風や
まことあふさう母
あらしと
おりへて
小町

大津絵の
茶のもしめハ
何紳
をなし

大津絵は
むかしおこに
[illegible]者
棲こ[illegible]初
しより今
に其茶勢
遺りて古雅
なる所名あ
と賞ぞなし
ならん

下河邊維恵寫

逢坂山
関明神
蝉丸祠

蟬翁妙曲起騷風
散入黃鐘六律通
莫管聲明今古說
琵琶湖上解絃中
秋蘿嶌

蟬丸

木鹿受

走井　逢坂大谷町茶店のあたりより流れ出る清水　走井の茶屋
拾遺　走井のほとりを過ぐるとてよめる　紀貫之
逢坂の関の清水に影見えて今やひくらむ望月の駒
新古　走井のつけ樋の雪かたふひけしのやそふをもる月の駒　俊成
百茶堂　走井より我が上の山ふもと小町百茶の像を安置す　小野篁妹
姚黄堂　古雅なり　笠原薬師　百茶堂の右ふもとにあり　石像の薬師なり
逢坂関　旧跡は逢坂山の峠にあり　東上下原町尼寺のあたりなり
文徳天皇天安元年初て厳重に関を守らしめ給ふ　文徳実録に曰
畿二十人兵具を帯し守護す　関守十二人小子部栖軽の子孫なり
旧記に曰く　其兵士家の未業一家の内より撰び出す　百茶堂の傍に小野
新撰　氏人探丸の随士なり　山階坂ふもと　逢坂山の関跡を遮る関守
正徳年中寺門と詳論に及ひ山王の神輿を防ぐ　後藤祀三永徳
探丸仕へしと　小令　逢坂山ふもと　新関を遮る関守
小野十三郎尉　逢坂山の関跡を守る　八年八月十八日　江陽屋板
古今　逢坂の関は　清少納言
後拾　逢坂の東路とうち渡る　在原元方
逢坂の関の清水に影見えて今や引くらむ望月の駒　紀貫之
新勅　相坂の関にゐてわたる人の数しらるる今朝の白波　源俊頼朝臣
後古　逢坂の関に流るる岩清水いはでぞ思ふ下の通ひ路　定家
後拾　逢坂の関の秋風吹くからに声うち添ふる鈴虫の音　素性法師
新後撰　横雲の空に別るる暁の鳥の声こそ秋は悲しき　源雅兼
後千　今もなを戸ざしやすらふ逢坂の関の清水に影は見えつつ　宗尊親王
新後　逢坂の関吹越ゆる秋風に声を関守の夢をおどろく　伏見院御製
後古　夕されば蝉の羽風も涼しきを逢坂越ゆる人は汗かく　為兼卿
新後撰　逢坂の関や荒れにし古へも清水は絶えず流れたりけり　雅有朝臣
新後拾　初そくや誰初るとひくからに人待つ関の名にこそありけれ　北政門院
逢坂の関の清水に影とめて今たちいづる春の駒かな　後醍醐院御製
こし方ゆく末かけてもいはふかな逢坂山のみねの松風　後村上院御製
みひさこうつる水ぐきの跡ふりて逢坂山に秋風ぞ吹く　後京極摂政
さもこそあらさかの関もすゑとをの朝ぼらけまで君をとどめば　藤原定家朝臣

車おかくかきなくるいとめでたし。御かへ手いと歌ゆく侍る為れこゝろはおう
さうくんのまやときこえられば。うちうくんのこゝろとかは。かたくさんを
ひらたく。三子のかくりづかさまりといふはあふさかれせたのるゆりとあれば
歌とあつく為のそこねはそらるとも世にあふさかれせたはゆるさじ
心かしこれせきとめ侍るめりときこゆ。行成
あふさかはくこえやまた関なれば為もかうひどあけてまつ所とあ
とありしうえどもをたしめのは僧都のきこれぬかをさへ侍たてとりなひてき
のちくしかは御子人なくさそあふさかはくこそよみへされく思しもせず成に
たるいとつろしとまうはせなふ

山近両國堺 ゆかしへ逢坂山の峠れかし南之今に両國寺といふ洋刹あり當時は遥分ゆ
山城近江の堺と後此寺の名物に大津繪又は簒盤縫針饅頭
等々繪は土佐又平あるに住て書物しとも簒盤は一里塚形ゆ善とは針は
此所の名沈の側世に名高し原此針細工人の家京東六条に大きなる池ありて
其側なれば沈の側針といふ東本願寺建立の時公命によりて針作ありて
逢坂山の葉に名沈と賜ふ旧名ゆゑんて今も池の側といふ

蟬丸明神祠 逢坂上大谷町左側にあり 蟬丸霊を祭る 御祭五月廿三日

関寺小町蹟 相坂庁原町阿弥陀堂ゆいふ又清水町の山ゆに世善寺といふあり未だ
見沙又小町塚は清水町妙光寺といふ絶京の寺にありけれども由緒定かならず

家集
日くらしのかく山里のタくれは風より外にとふ人そなれ 小野小町
日
百くさの花れなもとく秋の野におりひそそれ世をかやかめそ 仝
日
あるはかくなれはうれ世中にあるはいはれの日まくかけかん 仝

壯衰記
二皇五帝の妃も漢王周公の妻もいまだ此驕をかさぬ夜には錦繍をかさぬ口には
海陸の珍味ゆとくの人身には蘭麝を帶らし。名に和歌ゆ深じく萬の男ゆ
賤くのこと思ひくでし。女御更衣に心を帶けたりし後に十七にて母をうしなひ十九
にて父にとくれ。此一にて兄に別れ。廿三にて身をさたそしかも單孤無縁の獨人
と成てたのむかたもなかりたいみじかりつるさかへ日毎に衰花やうなりし顔年
くにまたまつ。ちて誘をかけたるたゞひも疎くのこなりしかは家は破まこく
月のこと空しくまこと。庭はあれて蓬生いてばらに志るまそになりけれど。
文屋康秀奏河椽にあらくくでうるゆさせられ事

古今
ひひめれは身をうれ草の祢をたへてはたゝ水あらはいなるさそおりふ 小町

と詠て次第にをちふれゆくほとに果ハ堂山にをきたるへる。人間のありさゆ
しれなく知る事し

清輔袋草紙云 小野小町之事見玉造云文書生涯壯襄其姓玉造氏也小野若住所之名歟或人云件壯襄記者弘法大師所作云小町者貞觀之人也彼玉造壯襄記者佗人歟

無名抄云 業平朝臣高枕ゑんとそをれにことよせてあげまのうこへゆゑなり。みちのくにいたりて
屋をしまといふ所にて屋どりたるなる夜野の中に奇の上に句を詠ぜる聲あり
その詞にいはく　秋風のふくそ淺なそもあかめく
といふ。あやしくおぼへく聲をたづ。ほこれをもとむるにさらに人なし。ここで死人
のかしらひとつあり。あしにふるなこれをこるにかのごとくのそのかしらのめにあかより
をこれなんひとりとおいでゐりなるそのをこれの風になびくをとの。かくはえなれど。
あやしくおぼへく。あたりの人にこの事をとふ。ある人かたりていはく。小野小町此國に
くだりてこの所にしていのちおはりにけり。をかたちかのかしらあれなりといふ。
おもふなりひとあれなれなりしくれなくなれど。涙をおさへて下の句をはけなり

をのとをいはしてをこれおいたり　とぞつけ侍。その堂をいたさつくりの
をのやいひなるとぞ侍る。人事はくりのこまちや。小野小町とおなし人かあらぬ
おもふと人々おぼつかなれ事にあらそひ侍し時人のかたり侍しと
つれ〳〵艸云
小野小町かなきいめてさごりなるべきかたろへたるさ侍ハ玉造といふ文にみえ
たり。此文清行か書りといふ説あれど。高野の大師の御能此目録にいれて。
大師ハ義和のそしめにかくれなくり。小町かさうり成と其後のことにや從
おぼつかなし

山神森　逢坂の山腹阿弥陀堂の後にあり
由緣詳なる次

関清水　逢坂の峠弘法大師火除名號石の傍にあり又関明神御旅所にもあり後世准へ
飛るものを聴の長明の時さへ詳なるに後世にハなかなさらしれかたくなし

古今
君の代にあふ坂山の岩清水木かくしてうと云ひ　忠岑

日
逢坂の関になかるゝ岩清水いつくしまし云ひしをれ　貫人志

拾遺
逢坂の関の清水に影みへて今やしらん皇月乃駒　英之

無名抄云
ある人のいはく。逢坂の関のしまりといふ。そしつて井とおかしかれどとなべく

人志り侍れり。志ゝ事はあらぬ。志ゝ所は別の和にあり。今はあるもなかれば、そこと
志まる人ぞになし。二井寺に因寶房の阿闍梨といふ老僧。さぞひやうり
其和を志れるかれどさる事やあるもあるとこそ所ぬる人もなし。我志なん
のちは志る人もなくて屋ゝぬべき事と。人にあひてかたりなるよしはさへ
ゆゑ。かのあぞり志れる人のふことをとりて建暦のそじめのとし十月廿日
あまりの頃二井寺へゆく。あぞりこひめんしく。かゝりにふるたとゝ成きゝ
はかしくまる人もかたく侍めるかめづらしくなん。いかぞか志るべきゝ
つゝぞうんとくともなひてゆく。関寺よりにしへ二三丁ばかりゆたく。
みちよりきこのつゝにをとしたちあがれる和に一丈ばかりなるいしのこう
ありそのこうのあんがしへ二段ばかりいたりて。人ぼめる和はまかなたち
むかしのせんの志ゝ所乃詠なり。道よりも二段ばかりやいりたらん。
いはいといへの志りへ手なりて。当時は水もなくて見ところもなけ
是ど。昔のなごり。おもかげにうかひていうになんおぼへ侍し。阿闍梨

かたりくいたく。此しゝ所にむかひて。水よりにふうをひそぞふたる
家ちかくまで侍なり。あれ人のまゝかとは志ゝ孫ぞ。いかにもたゞ人乃
井和にはあらざりなるかめりとぞ。かたり侍し

寺門におかく應安の旧記を見るに因寶房の名なし。卑其は亡滅せしか。又清水の跡成
あめふ本文の様今さぞうにいかり難し。大略清水町のかとりなる和

関明神祠 逢坂上行原町左の上方にあり。此志より大津清水町までの生土神とは
例祭五月廿四日神輿一基清水町御旅所へいたりあり

祭神二座 一座は猿田彦命又道祖神或は幸神とも称す
一座は蛭丸ノ蛭成祭は

法華 まれやこのゆくも かへるもわかれては志るも志らぬも相坂乃関 蛭丸

新古 秋風になひく渉芽のまゝにとゝ志ゝ所のあはれ世中 仝

同 世中はさてもかくてもおかしこと宮もつゝやもそてしかなれば 仝

修古 お坂の関のあらしはそけしたに立ぬそぞなる世成拾んやうあ 仝

金名抄云 會坂に関の明神と中はむかしの蛭丸のかのつゝ屋のあやうしかはしく。
はこに神となりてまゝ結なるべしいまもうちをくるたよりにそれはむかし
ふかくさのみかど乃御使にて。和琴なるひに。良岑宗貞言おね

とくひんかどの事ども也ぁもうげふうひくぴこくこそ侍ら
それど採九の姓氏詳ふならねど武部卿敦實親王皇孫の雅名ふ管弦
を常ふ嗜ご琵琶を善ー自流泉啄木の曲を愛ー敢ごれ人ふ傳次
世ふ遺ら會坂の関小菴を結んぐ山居ーる平生ふ琵琶を無名ご号次
採九頭い幸ふ体く體ハ僧ふ似さう時の人道士ごひみ似ごもいふ雅二位
ふの流泉啄木の秘曲を教ふんごくけ彦ふ通ふ事ご茶ふ遣てある時風雨頻ふ
衣其ま汲の如ふる感ーく秘曲を殘ら伝侍ー事ゆゑ江談ふ見えう
採九の蒲曲小延喜帝の皇子異ある通七ゐーく世の塵嫉ふ深ーば無心の境界ふれを育人ご似ら事ご侍ー
いれるたゐーもめーぐる時雅ハ延喜帝皇孫うく親王克明のるゐく
関小川相坂山の南溪より源ら流川とかつけく湖水ふ入
新千載
ふゆうふ伝お坂のいーはり関乃小川みぞのちぐーあを
金葉
吾那山お茶ちぐーく舎坂の関ゐ小川に綿をりかく
ら向山お坂山の小関ゐ杵の湯とりく
ゐ神祠あーへ

千載
紀茶ご伝関ゐ神ふら向吾ぐ
支承
吾居ふ川あ山坂山のさひ那ぐ
安養寺 小坂町たふあり寺門長吏ふ属次開基有禮久所
むーハ山上の山ふあり源世ぁぐ
本尊立聞観音 長さ八寸有禮久作の仏名あり
蓮如上人名騎石 上人ふ徒ふ無礙光如来ご徹ら
石面ふ彫ら伝ー時ぁれ伝事次
閑清水明神祠 清水町ふあり関ゐ神
社内小関清水あり拾芥ふ云関寺ふ
世喜寺 引街のたの山仁ふあり
魏ぞうーて二年ふの別院ご中ふ恵心僧都もあに侵ゐ今ハ荒ぐ成
本尊ふ阿弥陀ら仏体次
迫松山顕證寺 本尊阿弥陀佛 牛塔 高寺ふ牛ご本尊ふ弥勒のおゐく屠ぬまふ蒜てく傳伝ゐる
久津寺門ふあり西本願寺派帯納ご門徒迫松御坊ご称ご
本尊阿弥陀佛 長八尺観音勢至ご脇侍蓮如上人ふ作次
傳云寛正六年の春本願寺第八代蓮如上人洛東大谷ふ寺構ー中ふ一宇ご建ー
猴掟ら石御影ご称ー本尊ご安置ー住ーー堅田うら入津ふ来ゐ蓮如上人御ぐふ
損ーぐで長吏うら院ぞへお願ご寺門五那所の内迫松寺ご参階ーぐ
の恩徒ごぞうら関益蓮如上人あーふ止住ーぐ来ご十ゐ年ご西本願寺観雪
ご人の直筆十ゐ年余当山ご安置ご具法山科御堂ご移ぞれーゐ

近松沖坊

世喜寺

牛塔

大津茶屋町のいたれ
曙に月まで青乃
振ひに淀海一州の
水門みしさく諸國
の蔵屋あつかゆへに
上古志賀都大津
宮なりしかつら
の遺風とそ志るし

近州 大津

永師うね初の驛（うまや）あれうね東（ひがし）そなへ又関東二十八州東西（ひがしにし）江十八州糸（いと）うね志（し）ま里又本（はた）ほく三里半餘之滋羅町（しがまち）の名成八町（やちょう）とて人（ひと）此地（このち）ふ就（つい）及び湊海（みなと）國中の奉（たてまつ）奥（おく）物等（ものら）船（ふね）ほく運（はこ）び日毎（ひごと）ふ市（いち）成（なす）ほく京都（みやこ）へ文易（ぶんえき）次（つぎ）町（まち）数（かず）九十六町

諸侯の蔵
多（おほ）く集（あつま）り

我（わが）命（みこと）はさゝなみも皇（すめら）ん志（し）ま乃（の）大津（おほつ）の里（さと）ふ

支考

秋の日もかゝみ山のりみち繁（しげ）き大津の里（さと）ふそ

隆佐

勅公

閑（しづか）ほくそれそ吹（ふく）る大津馬（おほつま）のたてがみ一つ

知足

大津宮（おほつのみや）

日本紀云 天智天皇紀九年 是冬（ふゆ）京都之鼠向近江（ちかつあふみ）掖（わき）同帝六年三月辛酉朔巳卯遷都于近江是時天下百姓不願遷都諷諫者多（おほ）し云々

拾玉

若狭山ふゝき嵐（あらし）をかり入（いれ）て大津の宮（みや）ふ一夜乃花園（はなぞの）

支考

ほく波や大津の宮小貝（こがい）をみほく忍（しの）ぶそのつゆれに保（ほ）ら綿（わた）ぞ

資流

大津皇子（おほつのみこ）

天武帝（てんむてい）第（だい）二皇子之 日本紀云 容止（かたち）墻岸（かきのごとく）音辞（こえ）俊朗（さやか）也 天智帝（てんちてい）愛（めで）給（たま）ふ乃（の）ほく文学（ふみまなび）を愛（この）次詩賦（しふ）の興（きょう）大津皇子

日本詩賦の初（はじめ）と云

春苑言宴

懐風藻

開衿臨霊沼遊目歩金苑澄清苔水深曖曖霞峯遠

鷲波共縈響呼鳥興偏深群公倒載帰彭澤宴誰論

大津皇子

大津宮の舊蹟今の布政司の地ほくん名志賀都

旧跡（きゅうせき）志賀里（しがのさと）ふ

練貫水（ねりぬきみづ）

三井寺の禁大練寺の境内（けいだい）ふ練貫水（ねりぬきみづ）金字（きんじ）ふ有（あり）ほく

天智帝の御夜（ぎょや）と山水（さんすい）ほく寒（さむ）ふ湧減（わきへら）ずし

澄（すみ）ほく練（ねり）ほく

丑檀道（うしまつのみち）

辺（あた）ねる山の禁（きん）の径（こみち）之上古道（ふるきみち）坂（さか）の関石（せきいし）あり

詰（つめ）し所（ところ）遥（はるか）ふ今（いま）も三井寺大会（だいえ）の時（とき）双檀衆（そうだんしゅう）二十人（にじゅうにん）関前（せきまえ）ふ

寺門（てらかど）

長等山（ながらやま）

三井寺の上の山ふ成（なり）ほく古墳（こふん）多（おほ）し

南（みなみ）ふ連（つら）ほく

名志賀都

比（ひ）ほく湖（うみ）ほくろの山ふ花（はな）ほくさゝせらや人（ひと）ふ花（はな）のさこのり舟

旧阻

若狭路

第六

ほく花（はな）をるかゝり舟山ふ見（み）ほく尾上（おのえ）をおろす志（し）ほの浦波

第六

又（また）せゝなき志（し）のうゝ猪（いのしし）ふあらうゝの山ふ巣（す）ほくあるかゝりふ

猪鹿

めりらゝやむうゝなかゝの山の井（い）志（し）ほ

猪古

とう九祢（くね）のかゝりふ山ふこの松吹（ふく）る風も昔代（むかしよ）の聲（こえ）

玉葉

さゝ波や浦風（うらかぜ）ふゝく秋（あき）のよ九（く）もかゝりふ波

勅千

紀氏ちゝかゝうゝの山ふ風（かぜ）之升（ます）ほく

百首の内（うち）

あらむとそ山ふ松（まつ）も待（まち）せかゝうゝ志（し）ほ

新後拾

著京範疑

著京良清

第四

猪古

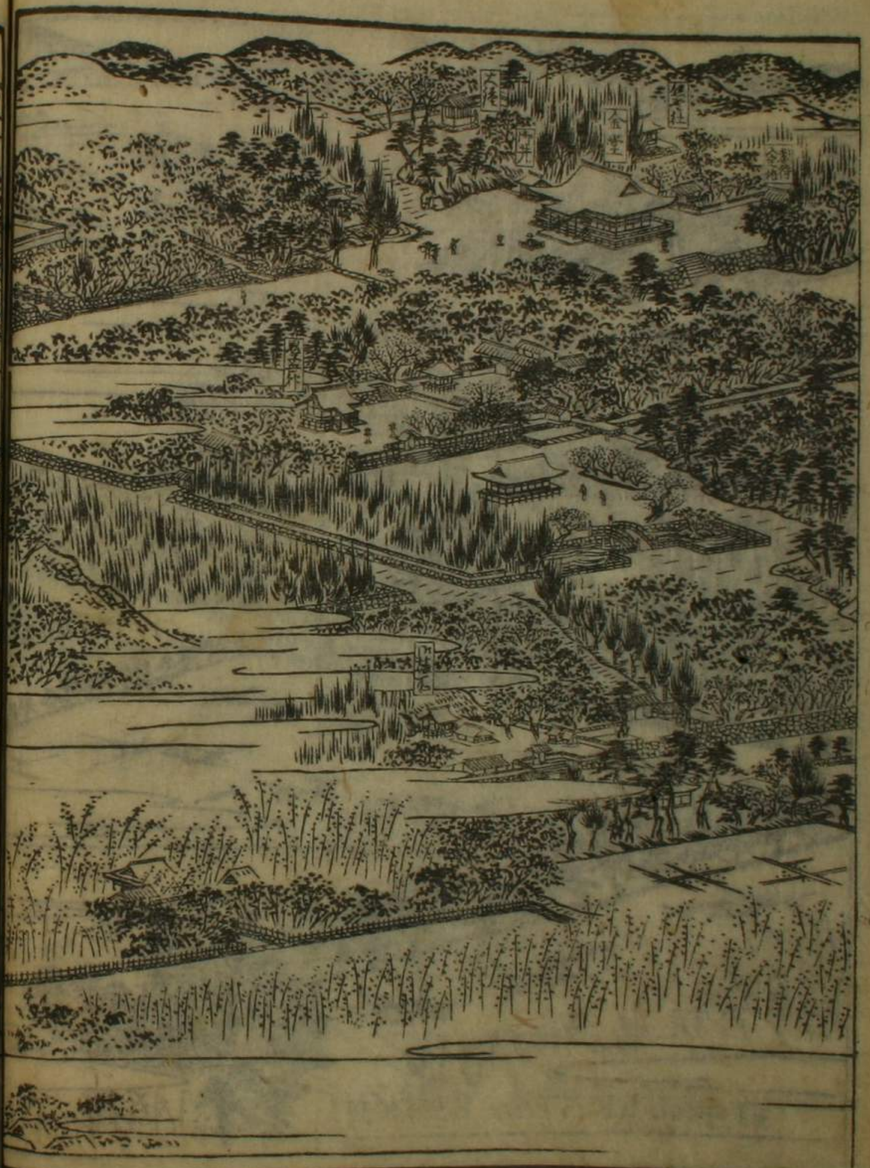
著中納言清愛

入道宰相宗盛

刑部卿範兼

入道三位教盛

二井寺
金堂
唐院
供僧
食堂
御井



淡海八景
三井晩鐘
湖面朦朧畫
不成昏鯨高
闇出圓城霞
間好是客船
月十倍楓橋
半夜声
相國寺林長老
ちふその度寄
くじめそと
まげさく三井乃
入あひの鐘
近衛関白時熙公
尾蔵寺
近松寺
八幡樓

長等山園城寺　志賀郡ふあり　名三井寺又は門と称す　仁験通称新羅明神

ささなみや三井の古寺ふりぬれど　玉葉　もらむまぐあく法のそこをみはてん

治ふたて人跡の者こそ哀なれゆくへさだめぬ古寺

天當山ゝ原　天智帝第五の皇子大友の殿舎なり荘園城邑の地なれば

園城寺と號次ゝ祇園精舎紺園化城ゝも比をるゝ　ん名初同帝六年

大和國花香宮より樂々波大津宮ふ遷都ありしに　天皇靈

爰ゝ感しく崇福寺ゝ建立し　金色丈六の弥勒仏を安し　其翌年之

園城寺ゝ崇福寺ゝ創を　寺ゝ傳記第六曰崇福園城俱ゝ天智之御願皇子大友

一年故爲ゝ崇福矣　奉詔而創両寺ゝ分位同等也就中崇福建立既園城

天智帝の遺勅を蒙り大友皇子の追福のため崇福寺ゝ他ゝ後ゝ

園城寺を再営ゝ新次ゝされよう　殿堂巍々壮厳玲瓏ちく給孤乃

布金ゝある其頃敬待仙僧あくに練りし奥観え年のまゝ天智證大師

小見く傳法ゝ授與し東北の石窟ふ入定を其ゝうゝ大師入唐し七天台山ふ

登ゝ清涼山ふ降ゝ文殊の霊跡を拝し国ゝ帰ゝ寺ゝ再ゝ龍ゝふ乗ゝ石象石橋ゝ

巡ゝ頭密二教を究ゝ唐ゝ年号ゝく帰朝し　淸和　光孝　陽成ゝ帝

の戒師ゝ成寛祚延長ゝ行ゝ国家泰平ゝ護ゝ於茲ゝ會ゝ暁ゝ朝し

寺門の繁栄益熾ゝ長等の山嶺ふ入相の鐘ふ響ゝ秋乃月ゝ

佐々波ふ流ゝ法ゝ聖衆来迎ゝ擁護の慈ゝ如ゝ源ゝ位

頼政ふ至の擔し平家の暴逆ふ伽藍ゝ焼せられ行尊ゝあさちの原ゝ歌唱

らんと述懐ゝ詠し天地ゝ亡ゝく龍虎ゝ哭ゝく茶床腥し　衛

右大将頼朝卿ふ當ふゝうゝ藤状ゝ捧ゝ平家没官の地ゝ寄附し

給ゝ事東鑑ふ見ゝく人口ふ膾炙次ゝ寺の高僧記ふも詳々ふ見ゝく世の

あうしゝを右れゝ三井の古寺ゝ源ゝ延暦ゝ寺ゝ一百餘年甦ゝく興ゝ盛

逆旨入鹿を誅し其罪陳を悔ゝく遷宮ありし事當山誌ゝ基

の始えとなをあらはす

○新羅大神社　寺門小院小谷ふあり五社鎮まるの其一ゝ貞観十七年有元大神の勧請貞和三年足利尊氏再営

祭神素盞烏尊　ほれ天皇等象の神像を鎮ゆ相殿一般若童子宮王童子と安ゆ右ふ火御子洞あり教羅ゝ湾れ源氏ゝ鎮ま府将軍源秘義の三男ゝ新羅三郎義光と号ゆ

社傳云　文徳帝仁寿年中有元大師入唐ゝ天安二年六月八日ふ帰朝の海路ふ老翁忽然ゝうゝく海上ふ現れてゝ新羅明神ゝ高僧の教法を護ゝ慈尊出世に到るべゝとゝ云終くんぬゝ依上洛の時仏神ゝ大師奏向ゝ東を学ゝ初メ峰ふ鎮座ゆ其後三井ふ院ゝ移ゆ五字文殊ゝ安置ゆ神代の時素盞烏尊五十猛命と三躰ゝ化ゝ神霊かの地ふ止る事神秘あり

○三尾明神社　南院琴緒谷ふあり例祭三月中卯日神楽ゝ慕本地堂ゝ著賢菩薩を安ゆ祭神赤尾白尾黒尾の神ゝ赤尾ゝ本地堂ゝ本尊ゝ白尾ゝ山鎮坐ゆ大行事神楽ゝ慕本地堂ゝ著賢菩薩を安ゆかゝ白尾ゝ大宝年中ゝ現ゝ黒尾ゝ神護景ゝ年三月十四日湖水ゝ現を其古跡ゝ成ゝ波止とゝゝ社傳云

赤尾大照太神　黒尾新羅太神　白尾白山権現

○護法善神社　大門の側ふあり社鎮まるの其一ゝ毎歳四月十六日向峯次祭神明星天神像ゝ安次大師の祀ゝ本地堂ゝ観世音ゝ安置次

○新宮権現　洞井ふあり又名新日吉社　後冷泉院天喜二年若大僧正明尊勧請次又勝軍地蔵ゝ安置次

祭神日吉山王新宮ゝ就ふ山王二ノ宮四ノ宮常宮摩多羅神ゝ鎮まるの其一ゝあり例ゝ九月五日神輿二基寺門境内大津西之町々の生土神とゝ

○熊野権現　金堂の側上檀ふあり九社鎮まるの其一ゝ紀三熊野宇初て勧請次

○金堂　寺門中央ふあり本尊弥勒仏ゝ安置次

○御井　金堂の御ふあり天智天皇用ゆ故ふ御井と号ゝ又智証大師ゝ汲ゝ産湯ふ用ゆ故ふ御産ゝ会の暁ゝ新ゝ汲ゝ仏事ふ用ゆ又仏徳ゝ尽ゝ時ゝ涸ゝ井ゝ大友皇子の誕生ゝ際ゝ忽ゝ湧出ゝ井ゝ基ふ三ゝ

○梵鐘　金堂の側上檀ふあり高サ五尺五寸直四尺三寸五分龍頭ゝ巧ゝ尽ゝ其ゝ文ゝ仏徳広大ゝ云々梵音海潮ゝ如ゝ聞ゝ者ゝ除煩悩障ゝ得ゝ菩提智ゝ云々延喜の仏師藤太秀郷勅を奉ゝ鋳ゝ給ゝ龍宮ゝ献ゝ入ゝ給ゝ其中の一器ゝ依ゝ又ゝ叡山ゝ渡ゝ給ゝ又太平元年三井寺回禄の時猛火比叡山ゝ焼移ゝ鐘ゝ自ゝ鳴ゝ三井ゝ来ゝ又ゝ更ゝ鳴ゝ半ゝ又ゝ強ゝ鳴ゝ三井ゝ人ゝ多ゝ谷ゝ入ゝ山ゝ伏怒ゝ鎰ゝ取ゝ寺ゝ門ゝ傳記云ゝ寿ゝ永ゝ寺ふ寄附次法器ゝ鐘ゝ寺門ふ幽幸ある時ゝ全体ふ汗ゝ流ゝ撞ゝ木ゝ撞ゝ破ゝ一日玄旧ゝ修ゝ又ゝ新ゝ鐘ゝ掛ゝ山門ふ登ゝ時ゝ自ゝ鳴ゝ其ゝ響ゝ三里ゝ聞ゝ云々

龍去くゆゑを見ふ事を發る事元のごし又建武の紀ふ運職ゐを
集ふく北中ふ安くおのがく是足利將軍義利
を浮ゐの古瑠へくく拾出しく寺宝ふ次當社ふの中ふく
山祇鏡ふ貴一ふ次

○食堂　金堂の東ふあり本尊ふ釋迦佛　大觸　倉堂の側ふあり
赤梅檀ふ見ゑ觀音ふ天の
作

○唐院　金堂の南ふあり初ハ唐坊と号次傳法灌頂の道場ふう寺記云
唐の青龍寺ふ於ふ中央ふ同し
御骨大師斗栱中央ふ同し
と云ふ總く見へ即其像ふ写し
護摩堂　唐院ふあり長日貴祚等修
三層塔　唐院ふあり本尊釋迦
新山王神祠　唐院ふあり御當家
寶藏　唐院ふあり大師將來の諸尊教法傳法灌頂の室具ふ
藏む什物寺門傳記ふ見へたり

△大日覺王寶冠　一頂
△阿難尊者草鞋　一足
△尊星王菩薩像　一軀

右五品唐青龍寺傳法阿闍梨法全より多詫大師ふ附與ふ

△灌頂三摩耶五鈷杵　一具
△白毫佛舍利　粒ゐ大和國比蘇寺ふ
△五鈷金剛鈴　一口

其外雜佛雜器數品あり

○十八神祠　南院ふあり護伽藍神ふ次貞觀十七年
大師勅作祭神ハ七体経の文ふ依ふ
伊勢　大日孁尊　十禪師　客人　宗像三宮　八幡　賀茂　住吉　日吉
平野　春日　鹿島　江文　冊生　兵主

○辨財天祠　舍堂の北池の中ふ
各小祠作の堂ふ安ふ

○住吉祠　勅作ふ

○燈幢石壇　金堂のあふあり
内陣の三燈ふ中央佛法を悔く伽藍を創し
湯ふ右ハ国土豊饒ふ二脚
小入く三燈ふ
挑ぐと云ふ

○經藏　梵鐘の側ふあり尊氏
之愛長七尺ふ唐本一切経毛利攝元等附
ふ入く三燈ふ
繁榮ふ擬し
左ふ

○教待仙人入定窟　金堂の東ふあり其姥氏を多る人
智法大師ふ見へく若ふ附屬し傳法
百年ふ至へしへとも容顔壯年の
ふ一若ふ奥觀と
聲人真骨忽ち
蓮華とある

天智天皇　潛龍の日逆呂入鹿ふ誅し真罪根
勅作ふ真法供養を修ふ
繁榮ふ擬し
左ふ

○圓満院御殿 寺門境内にあり 聖護院宮 圓満院宮 實相院宮 此三御門跡とのりて三井の長吏とす

○安樂行堂 智證大師の建立也 小院遊義谷にあり 地蔵・弥陀・釈迦 三尊は安阿作

○正法寺 南院にあり 初めは聖願寺と號す 世俗巡禮観音 或ハ高観音とも称す 西國巡礼十四番札所なり

本尊如意輪観音 脇士右毘沙門 左愛染 寺門傳記云 後三条院御願寺なり 延久四年の春後三条帝御不豫 調にて果して平愈ましぬ 時に大僧都頼範詔を奉りて一寺を建て金色等身の如意輪観音像を安置して祈るに忽ち験ありて御悩平愈す

或云 正法寺ハ初め南院山上にあり 文明九年三月朔日大風の瑞災によりて今の地に移す 男女の諸人絡繹の詣たえずとぞ

○福神石 正法寺奥院にあり 石塔婆角石俵石の三石をもつて由縁詳ならず

○大悲閣 正法寺本堂艮の方にあり 方三間半 慶長十年あらたに建 近江の八景眼下に見えて 晴天なれば沖の嶋竹生嶋なども遥に見ゆる 又中秋の月を賞するの佳景也 麓よりる銀満碧空を貫くの高閣なり

三井寺登覧

何來天地動玄陰
落日樓臺試一臨
秋入九江波蕩漾
雲連三越氣蕭森
湘靈鼓瑟思無盡
楚客行吟恨竟深
不識關門風雨夜
幾人操曲遇知音

周南

○近松寺 正法寺の西の方山腹にあり 古ハ近松谷に百二十六房あり 三井五別所の其一なり

本尊千手観音 金色長一尺三寸 智證大師の作 額に高観音堂とあり 世人正法寺と巡礼観音と高観音とおなじく思ふは よりの俗称なり 傍に阿弥陀堂あり 若光寺といふ 本の撲形にして堂金仏として又堂内に恵心僧都の作千躰仏あり 安置鎮守ハ護法善神弁天稲荷金比羅などあり

○八詠樓 観音堂に隣る高樓をいふ 近江の八景悉く見えわたり 中秋の月ハさらなり 騒人墨客こゝに登りて風流を遊ぶを五別所系勝の一にして又二に双ぶものなし 絶妙の眺望を賞せずんばあるべからず 又菩提樹樓あるに世に名高し

○安然和尚石浮圖 南方山上にあり 七層の石塔婆なり 五大院先徳安然和尚と號す 當寺ハ安然の練行幽閑の所なり 則入寂の地なり 當山ハ關山の東北高嶺なく故に水乏し 一日和尚試に獨鈷をもつて岩頭を穿つ 忽ち水漏出る 寒暑に渇せず 無双の霊泉なる名づけて獨鈷水として今尚存す

○尾藏寺 近松寺の北にあり 三井五別所の其一也 開基智證大師 中興慶祚阿闍梨 古ハ尾蔵寺谷に八十坊あり 今僅に五房存す 故に

本尊十一面観音は安然の作 頭ハ弁天 胴体ハ毘沙門 足ハ大黒天なり 故に三面観音とも称す 又無脱観音ともいふ 又黒谷とあり 又西の方を町井に慶祚阿闍梨入定の地あり 傳云 寛仁三年十二月廿二日入定 年六十五 寺門灌頂の祖也

○鶴尾八幡宮 尾蔵寺の鎮守也 康平六年伊豫守源頼義朝臣自ら勧請 足利尊氏公出陣の時奉納あり 故に造営し 祭礼に流鏑騎馬あり 今廢れり

○微妙寺 関山の小尾蔵寺の西にあり 三井五別所の其一也 開基慶祚阿闍梨なり むかしハ九十六房あり 今僅に五房存す

本尊十一面観音又某師仲公安次あれいむう〳〵志賀寺の本尊観音あれいむう〳〵志賀寺ハ崇源ちかいつへ又如意寺の本尊観音あれいむう〳〵志賀寺ハ崇源ちかいつへ又如北向不動堂ハ智證大師七度加持の尊容ありく園城寺四方小仏尊体と安置其中の一躰ありく

○水観寺

寺門惣門の下路の小ふあり

二井五別所の其一あり

二井小院惣門傳記ふハ十一面観音と記次

本尊茶師仏と安次寺門傳記ふハ十一面観音と記次

開基大僧正明尊

○常在寺

二井小院惣門の外新羅社の西ふあり然聖之前権現と勧請次

寺門五別不の其一あり

本尊釋迦仏と安次開基大僧正行尊當寺西小の山上ふ千石岩と云

名岩あり

○早尾明神社

多在る西小ふあり山王中七社の内早尾明神の勧請ん或説云早尾ハ貴布祢神ん又比社の下ふ石不動尊あり寺門四方繞ふあり三筋ふ流く

熊庄の其一あり

山地ふ懸不動川とのひまハ湖水ふ入

外寺内寺外神社堂阁多〳〵繁にありくちふ器に

○亀岳

寺門境内ふあるむ〳〵教待仙人ちふ奥嚴を舎〳〵其殊骨横くる形ふ似ふり故ふ人呼く亀の岳と云

○亀喘橋

亀岳のやふふあり教待仙人奥嚴の殊骨ふ似ふ流を忽渡く橋と名あり橋下の流ふ奥嚴今ふ多〳〵

○村雲橋

寺門のあふあり傳云智證大師ふ徴ふり寺門〳〵ゆりさせし時此路上をふ西の方〳〵ゆりさせし時大師疲れ給ひて此橋の下ふ暫く御休息ありし故ふ村雲橋と名付く

○夜櫻

中ふ掃櫻の老木ふあり夜ふ掃ハ枯葉しく今ふ尚夜ふ掃ハ枯葉しく

○津明水

南院筒井ふあり方三尺の井之

筒井津明の四跡とそ

三井十景

筒井喬松　金堂白櫻

唐院夜雨　靈窟新羅夕蝉

琴谷冷螢　鐘亀塚暁霜

正法眺望　護法丹楓　龍池寒月

二王門

大門のあふあり金剛力士ハ仲立運慶の作ありく

靜籠寺ふ火災の殿ふ玄奘の渉く成く西天ふ小車風のふ〳〵閑姑大師あれを見く火害穏く〳〵と翌年馬龍寺ふ移し書籍を多代ふ子孫ふ伝ふ

院宇回禄を免ん為ふ凡身ありさる事ふ故ふ村雲橋とあり

○北院

遅桜谷　上谷

愛心谷　中谷

下谷

南院

花谷

琴緒谷

翁井谷

○智證大師傳記和讃

少納言藤原通憲卿卅之難見元亨釋書不取當山

帰命頂禮前入唐智證大師贈法印

清和光孝陽成乃三朝乃國師奈利

悉達太子乃蹤ふ追十九出家志給ふ雁天

檀特山乃風傳遺山林苦行十二年

承和五年冬乃月
嘉祥三年春乃夢
文德天皇宣下志天
唐乃大中七年尒
天台山仁登天波
清涼山仁望天波
長安洛陽廻津々
西天唐土乃師仁遇天
良諧和尚乃開元寺
法全闍梨乃青龍寺
南嶽天台遺身塔
石象石橋見渡志天
顯教密教學東天
自宗他宗昔無幾
歸朝乃波仁波新羅國
清和天皇元年仁
新渡乃法門千餘軸
爾時大師奏聞志
百六十年行邉留
園城寺仁天波勅仁依里
仁壽殿仁波詔乎羨氣
金光明乃齋會仁波
清涼殿乃決疑仁波
熊野山乎攀志時
八尺乃馬飛來利
權現三所乃室前仁

大聖明王感見志
山王渡唐乎告給不
入唐求法被許幾
嶺南道尒着尒氣里
大師乃聖跡礼拜志
文殊乃靈地乎巡礼志
勝地名跡場乎踏美
梵文漢語乎窮多利
一乘心蓮花開氣
五瓶智水雨灑久
無畏不空影像院
銀地金地毛修行志幾
在唐凡曾六箇年
經論章疏千餘軸
權化乃善神影嚮須
大師歸朝志給天
勅宣下利天弘未利幾
三井仁唐坊建給不
生身弥勒乃附属淂津
宗叡僧正灌頂志
王臣入壇始利幾
身子迦旃乎拉志幾
護法清辨物登勢須
道路迷比天不知程登
道乎示曾奇特奈留
一乘八講修世志加波

松堧扉乎押披幾
賊施乃幣帛乃妙乃色
和尚乃恩德不限良
西山松尾大明神
東門中心天王寺
陽成天皇敬比天
亭子天子貴比天
天台弟五乃座主登志天
園城弟二乃貫主仁天
一切經論三箇遍
諸尊傳法二百人
五百餘人髮乎剃利
王臣道俗歸敬志天
千里万里波掌呂
門弟怪美問志加波
良諧乃遷化乎遠久見天
元璋禪師加去志日波
圓載入海世志尅波
時仁此等乎聞志人
後乃日宗人告志仁曾
寛平三年冬乃天
十月二十九日仁曾
其時十方世界乃
天乃音樂雲響幾
圓寂乃後弟二日
大師頭乎撻氣志仁

神感實仁甚志
醍醐乃妙味乃希乃色
門第必寸憐波牟
詞乎通志問荅邉
最勝講於曾始免置久
法眼和尚仁令叙世
權少僧都仁補任須
二十四年戒授氣
三十三年法弘牟
大乘小乘鏡美懸氣
三部三密珠瑩久
三千余人戒授氣
德行天下仁充滿利
三世十方胸仁在里
金剛薩埵乃告登演不
鐘乎鳴志天諷誦志氣
声乎擧天曾悲泣須留
涙乎流志天悲比幾
驚幾怪美疑比幾
一事毛不違信乎取留
生年七十八仁志天
大涅槃仁波入給不
菩薩聖衆室仁滿千
定印結天滅仁入留
三夜乃枕乎替志加波
門弟涙乎流氣利

延長五年冬乃季
天皇勅宣志給天

○智證大師御影銘 廟塔在二四明嶽ノ東一

雙瞳遠瞻　奇骨欽鑒　覺月現相　夢日繫陰
花頂歩石　英聲振金　識良譜厥　山瀲阻深

○大友皇子傳 懷風藻ニ出此書ハ天平勝寶三年淡海三船ノ所レ撰也三船者大友皇子曽孫葛野王之孫池邊王之子也

皇太子ノ者淡海帝ノ之長子也魁岸奇偉風範弘深眼中精耀顧盼煒燁唐使劉徳高見而異之曰此皇子風骨不似世間人實非此國之分掌夜夢天中洞啓朱衣老翁捧日而至授皇子忽有人從腋底出來便奪將去覺而驚異具語藤原内大臣生日然臣平生善是輔願大王勅修徳政此事乎臣聞天道無親惟女願納後庭以克其之妾帝之妾遂結姻戚以親愛之年甫弱冠拜大政大臣總百揆以試之皇子博學多通有文武材幹始親万機羣下畏而莫不肅然年二十三立爲皇太子尚書令毋木素貴子等以爲明悟雅愛博古下筆成章出言爲論時議者歎其洪學未幾文藻日新會壬申之乱天命不遂時年二十五

志賀都

古跡志賀里西郡村ふ作前門とゝ云ふ又ひと地の中ふ作楸ありとそ云ふ又ひと云ふ田畑の間ふ作楸ありとそ云ふ又ひと云ふ里の地ありとそ云ふ又ひと云ふ旧都の跡ふ作神社佛閣古墳ありとそ云ふ又ひと云ふ初ノと記せるものあり

皇明光二日月一帝徳載二天地一三才並泰一昌

万國表二臣義一

五言述懐一絶

道徳兼二天訓一鹽梅寄二眞宰一羞無二監撫術一
安能臨二四海一

大友皇子の詩藻ふ載る所ふ園城寺皇子の古墳ふ在りとそ云ふ日本紀ふ又津皇子詩賦を作る初ノと書ふ洗ふりて又汝又津皇子ふ作ふ魁ふく作ふ藻ありと云ふ本朝詩賦の規則定るふふりく初ノと記せるものあり

日本紀云

景行天皇五十八年春二月辛丑朔辛亥幸二近江國一居二志賀一三歳是謂二高穴穂宮一
江國志賀里西郡村ふ作前門とゝ云ふ又ひと地の中ふ作楸ありとそ云ふ又ひと云ふ里の地ありとそ云ふ又ひと云ふ旧都の跡ふ作神社佛閣古墳ありとそ云ふ又ひと云ふ初ノと記せるものあり

六十年冬十一月乙酉朔辛卯天皇崩二於高穴穂宮一時年一百六歳葬二於倭國之山邊道上陵一

前王廟陵記云大和國山邊郡上總村東陵一筒所アリ然レ圧一決シ難シ

古人ホ和礼有哉樂浪乃故京乎見者悲寸

高市古人

千載
そゝ波や
志らの
都ハ
あれ
ふしを
むかし
かゞらの
山橋
かな
漢人志らぬ

文鳴 貞圖

志賀里 三井の小山四村あり 家成 西郡正興寺 新左家 赤塚等之

玉葉 神よいかに都の月に旅祢してくおりひや出る志かれ古里 藤大僧正忠源

夫木 橘の花やはりとの花那らん香しそむかしの志かれふる里 光明寺 関白

滋賀花園 志賀里 新左家成 いふ所なし

千載 さく浪や志かの花園とる友に昔の人乃心成そしか 祝部成仲

新古 あきよりは志賀の花園稀にたに逢かは聞ん其乃ふるさと 橘 大政大臣

新千 文林守なれさの家なかひきて昔も老し志かれ花園 定家

志賀山越 滋賀里 赤塚より登る峠と越 山中里 白川村を 経て京師に出る 志賀山越なく 山中越といふ

古今 山河に風れりをとる志からみは流もあへぬ紅葉之なり 春道列樹

同 白雲の所もワクにふり志けは岩ほ木も咲花と志を見出 紀秋岑

後拾 櫻花乃みえぬまて散にけりいかはしへき志かの山さく 橘成方

新千 白ひ来る風の役を枝打ふく花子越れ志かれ山みち 法中定為

滋賀浦 大津の浦より 幸崎及ひ下坂本 比叡辻の 堅田の浦をいふ

拾遺 さく波や志かれ浦風いかはりさく浦のうちれ源しかるらん 右衛門督公任

後拾 みるめしそあふこの海はうこ所ゆゑ吹たにうよ人志かれうら風 伊勢大輔

新古 志かの浦やをさうりし波まかり氷て出る宵明先月 家淹

彰後撰 志賀の浦れ松吹風のさひしさに夕波ちとり立ね啼也 權中納言公實

玉葉 志かれ浦や時雨て渡るうき雲に三上の山を半かく隠 漢人志ゝ

後撰 あふ坂の山越もそくかかむ是を家にはくく志かれうら波 後京極摂政

新千 昔なる沖の小鳥れ旅祢ふも心にかく侍志かのうら浪 法中定為

彰拾遺 志賀の海乃白ゆふ花の波れ上に庭を分てうら風ふ吹 家淹

彰後古 志かれ浦や湖てる沖は雪こめてく秋もおもろの宵明乃月 後鳥羽院

滋賀大脇田 今さゝかなるに

後古 かちの人の汀れ氷ふとなるし渡ましてぬまる志かの乃大脇田 寂蓮法師

志賀津 今さゝかなるに

後撰 見るめなれ志かの津のあまれいさり舟若とは終にこかれそをる 洞院摂政 右大臣

下河邊維惠

黒主祠

志賀 祀る五窈ふめり此地の生祀ならん

創祭 両度六月朔日九月十六日

祭神 大伴黒主の霊を祭る 古今集六哥仙の一人なりとて

おほやまもの哥めりいそのかみふるきみやこのあれゆけばふやそをとめるがごとし

古今

そひて 案ずに此祠に古例の

左の社司ならん

ひとり大伴ぬしをこそ

ひとりごちぬしをこそ

ありつけりをこそ

ふせんかへて

ふせんかへて社司をいふなるべし

注視

ふせんかへて社司をいふなるべし

亜名称之

志賀のさとりふ大道

いにしへされ亜りの

傳云黒主い 光孝天皇の時代人なり

用ゆることなし志賀の荘園窈ふ一邨あり

大友與多麿の祖都奴麿のまた

祿賜りし半邊棚に見えし仁和のそのかみ大堂舎の和奇城まり

字多帝 叡聞も而ふ

祠の東田の中ふある土人をそこを石といふ明神は石ふ乗向ありて

と称び祐勝の及び訴をも遠しと

ありうく神ふある縁と神

大友の裔みうく

大伴

大友皇子の苗裔ん法改て大伴の字と

ありひし

用ゆることなし大友皇子の苗裔ん法改て大伴の字と

大友與多麿の祖都奴麿のまた

祿賜りし半邊棚に見えし仁和のそのかみ大堂舎の和奇城まり

字多帝 叡聞も而ふ

祠の東田の中ふある土人をそこを石といふ明神は石ふ乗向ありて

と称び祐勝の及び訴をも遠しと

ありうく神ふある縁と神

大友の裔みうく

大伴

大友皇子の苗裔ん法改て大伴の字と

用ゆることなし大友皇子の苗裔ん法改て大伴の字と

大友與多麿の祖都奴麿のまた

祿賜りし半邊棚に見えし仁和のそのかみ大堂舎の和奇城まり

字多帝 叡聞も而ふ

祠の東田の中ふある土人をそこを石といふ明神は石ふ乗向ありて

と称び祐勝の及び訴をも遠しと

ありうく神ふある縁と神

大友の裔みうく

大伴

貫之祠

志賀正興寺村ふあり生土神と

祈仙黒主ふ對しく

崇福廃寺

志賀里 其趾踪定めるべくに

一名志賀寺又名建福寺

拾芥抄云延喜十七年十大寺の其一ありしかど

天智天皇

都ありし事日本紀ふ見えし大寺門記曰

天智帝七年春二月金人

現しく長等山ふ霊區ありこれ遷居の命の後ふ

勅しありし金堂丈六弥勒仏を安置ん

支本

仁人の光た何祢ありそれみ名之人ふ志の社曙

名勝考云

ありしふ帝の御裔ふをん人のありしかど

ありそのしこれりの人と

ありしたえさしいろくの事を

賛して曰祇苗ふ潤神を

讃ずる五學誰密と

長等山

天智天皇志賀宮ふおはしまして

勅使と

帝陵あれぞ

勅使と

帝陵あれぞ

名勝考云

ありしふ帝の御裔ふをん人のありしかど

ありそのしこれりの人と

ありしたえさしいろくの事を

賛して曰祇苗ふ潤神を

讃ずる五學誰密と

長等山

天智天皇志賀宮ふおはしまして

勅使と

帝陵あれぞ

姓氏録ふ高皇産霊尊の五世大坂

御時大伴武日連ありく

く事日本紀ふ見えし

都ありし時日連の

奮仁紀ふ又大友主

双び出る事明らか

仮世混をくく

景行帝

皇子

日命の

孫ふ

隨從しく東夷征伐ふ

景行帝志賀ふ

天智天皇

金人

天皇殿威

安置

則崇福寺に歸〳〵給ふ後湖水のめぐりを神泉と稱給ふ

續日本紀曰
天平八年八月乙酉以近江國朝書法一百卷施入崇福寺 類聚國史曰
弘仁六年正月崇福梵刹二寺、禪居之淨域伽藍之勝地也 同史曰 同年
四月幸近江國滋賀韓崎便過崇福寺大僧都永忠護命法師等率
衆僧奉迎於門外 皇帝降輿升堂禮佛更過梵釋寺停輿賦詩
群臣奉和大僧都永忠自煎茶奉御施御被即御船泛湖水國司奉
風俗歌舞五位已上並禄以下賜衣被史生以下郡司已上賜綿有差
延喜式曰 崇福寺傳法會料二万束修理料五千束
太平記云
むかし志賀寺の上人といふ人ありけり學問修行を心にかけて
年久しく九品の淨刹を願ひ給ひけれども貧窮の人にて日々の
供養もいとなみ難かりければ常に歎き給ひけるが或時門前を
行く車の牛の角に水あげられたるを見て上人門前なる小家の
軒の板を取て水桶の底を打ぬき車のわに入れ遣りて牛を助け
ければ車の主悦て布一端を上人に與ふ上人これを見て觀念の
床の上に妄想の化の一を立をひらくに稱名の聲止て八功德の
池の水波をたゝふ向ひ給ふ佛菩薩觀を成し給ふ此由を人申ひらき
御門不思議の事に思召志賀の寺に御幸なりて上人の庵室を
尋ね御車のわを見給ひ遥に御車のわと云ふ心を上人御見知なさゝせ給ひおの〳〵
まで立たまへり遥に御車のわと云ふ心を上人御見知なさゝせ給ひおの〳〵
その角ある方もかううちれば牛の居ふ立所も布尊ふ向ひ給ふ佛觀念の
床の上迄も妄想の化の一を立をひらくに稱名の聲止中迄たゝふ八功德の池
はたゝふ水もおだやかなるも昔にいくらも變ひ
閑窓の月ふうを吹けども老をおそひ
浅生の露ふ消ぬ間に名利のゆめ覺よかし
源綱ともせざるをひく上人孤裘小袖の杖をはさまざるく來迎の御眞影
御所〳〵まく鞠のつぼねやその女ふ一日一夜を立うけ給ひ
俄に着給ひし人〳〵ゆうんとあやしむるもおろかなり御眞影御所
内よりうるふ御燒せられく是いかうなる忠變の花眞の如くなる五圓を

○滋賀郡倉義景の家臣
○盛安寺 淺井氏祖父
○ひろく行基菩薩
○觀音あり都て廢寺の旧跡
○梵釋廢寺 寺門傳記補畧云長等山東の麓、真古蹟といふ
始造梵釋寺云々 高僧記云 天武天皇 延暦五年春正月 後勅於近江國滋賀郡
天帝釋各長五尺 天皇等身之像之 梵釋寺 安置
十九大寺 其一寺之 梵釋寺 近江國 水田百町 勅施入
同十一年 近江國 水田百町 勅施入
○明智光秀城墟 志賀郡 坂本村の上方にあり
六月ふ廢次 盛安寺ふ移る 智光秀 居城
○唐崎 幸崎と書 大津より二里ふあり
古今名所

千載
波の花沖こぎたてちりくもり水の表に風や成らん

月影消め氷とみえてかぐさび浪よる志賀の唐崎

新古
樂々波や志賀の唐崎風吹くとかすめる春の夕暮

後拾遺
こぎさだの浪は真砂のほそやそま人こぐ目の氷た秋風ぞ吹

伊勢
若狭國
近江なる入道
前関白
元輔

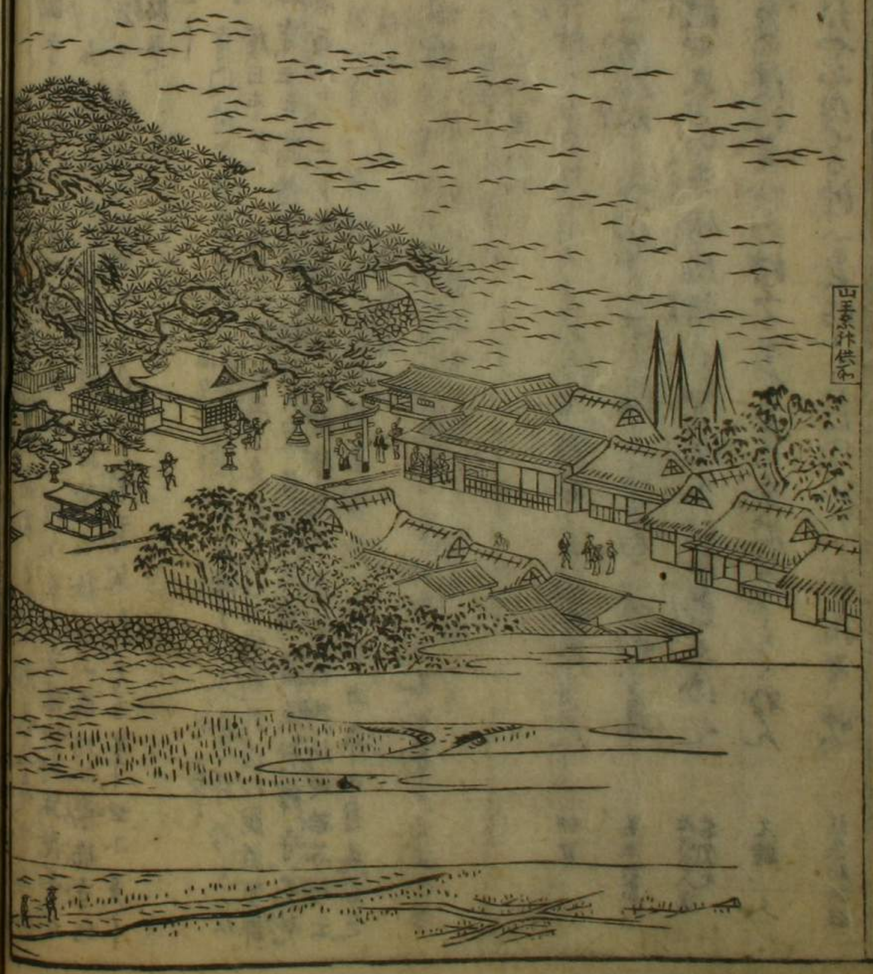
身の上ふ當へきよふ祈ゐ〻病ぞうのそれ繁ふなさけ成ける
かくさむんもこそあれ〻〻しくそ石て上人これ〻〻めされ〻〻つる〻〻ひ
て中門の翠簾のおふひさまほいて申出さるゝもかくけうの〻〻そあた
ゝひろる御息所のろ〻うあるみ雲色のそでおそれ多くくも
おぼ〻めされ〻〻者のでくあるみ御ふ〻〻ふやうつたら
させ給ひさるみ御ふ〻〻ふやうつたらにとるうたゆうく
とよ〻ほと〻〻れいやうくみ〻〻ふ〻〻ゆうくなるめくに
初そるのそろ〻れ〻〻のみて炎〻ふ〻〻ゆうくなるめくに

おくらくれ〻〻のうそかれそちを繁ふいれそ〻〻ゆうくなるめを
ゆきゝされく雪のんをそかぐさるゆ
りの尊宿ゑもちげ〻〻たゝ愛仏修りの道あり〻〻

今志賀赤淵村ふ建福寺の旧跡〻〻く天通るとらく伴生家の寺めり又横松年ふ
崇福寺の旧跡〻〻く盛安寺といふ〻〻天台家の寺めり山寺の縁起ふ

十載
いつとなく
こしのる様に
淡月れ
光をやとれ
志らの
かゝされ
法橋性憲

唐崎社
一ツ松



彩春
さく波や
志らの濱松
ふりにふり
逢世に
子日
あらん
後成

かゝされの
松へ花より
朧にて
[illegible]

明智左馬助光綱
山崎合戦敗ぶれて
坂本城へ落ゆく時
大津にて羽柴方
堀久太郎秀政に
囲れ途方かく
名ある駿馬に
乗なれば湖水一
ざんぶと乗こみ
猶聖永徳が遠
玄龍の陣羽織に
三ッ山の兜を着
威風凛々とし
湖上をわたり
本陣の松乃
汀に着しを
古今の雄将
楚の項王乃
烏江をわたりし

おもかげにも比せんと
歌味方ありしが
見て賞嘆せば
とりつかせ給し

恐じく海河が
ひたるは実は馬上
にあらず其騎人
を縦鞍鐙にて
付歩り立ぬく
おりたりつゝ海之
昔の佐々木摂原
もしれ之馬上
にてわたりしが
馬居をくらせて
動りに是馬術
のなひ之とぞ

山王祭
唐嵜
神供

唐崎神祠　幸崎の松の下ふあり日吉山王の摂社也
祭神海火童命　毎年六月晦日夏祓後ふ遠近群参する事數千
御神詠　はひ花ぐ舞とみやうふつてこぞみを志げやのふをけ末ゆけてまれ
神主　御祓を始めとうとさるふおろぢ細を神のうけむくもろ〳〵
日　おくふかそ〳〵まつ〳〵の渚きよく舟ふもかへ紀氏右衛門
○山王例祭ハ四月中申日申刻ふ至ふて七社の神輿大宮より下ふ八柳
土俗七本松
より船おく〳〵一數ふ漕つれ幸倭の松れ色湖上ふ双ぶ脳折より
多く神供船ふ名楽を奏し七人の童ハ猿の形を真似び社僧ハ補経しく
神供　粟の飯を盛る
一袋を添て船より船へ賜ふ日吉の社人ハ渡ひ放盃神式お調へ神供船
より相撲の太鼓を撃ば七社の神輿又一數ふ漕つゐ若宮の浜へ還御ふ
きふ神輿を観んとふ多来陣沿若及び遠近の貴賤おしふ黎ふ湖上
ふ船を浮べ家々の紋の幕ふ音楽めぐらし陸ふハ演松風ふ諷々謡ふ
聲ふう揉の声楽々沿の音櫓柏子のきあふ々宮司船諸侯廟の船
湖上ふ足ふく船中翩翻とうごめく波海貴一の賑ひふうふ早振神の
ものゝみハ色ゆゑ松ふゐぐひ鳶都の余波今もありくむしろかれ
新治郡
風俗
ゆゝ傷や浅き浦ふまふたゆゝ神のみふ〇の沿をしそおりふ

唐崎一ツ松　幸倭の候者　社頭ふあり　読ニむ
湖水へ磯ふさゝ　松葉髪ふ及び枝ふうねり
ねふ　古来より平三十度ふ遠ふ真ふ
一様ふまくあふゐる　ゆゑふもみふ
異風俗　ゆゝふ一つねふ紅葉
ゆゝふさゝやゆをとふえゆゝ真砂地ふ
ゆゝふ色ふ一本の松
祈れ〳〵神のみゆえのいみ
それ幸崎の霊松ハ様の園五易高三丈餘数ふの枝葉四方へ繁うく
あふふ社頭へ靡きあふ湖上へ秀遠く眺を望巌のふく辺く視ゑで

従二位権中納言藤原朝臣定家
三河入道見西遠
従二位権中納言藤原朝臣為家
入道二品親王尊円
従二位権中納言藤原朝臣為世
従二位権中納言藤原朝臣為藤
従二位権中納言藤原朝臣為定
従二位権中納言藤原朝臣為重
従二位権中納言藤原朝臣為遠
従二位権中納言藤原朝臣為忠
従二位権中納言藤原朝臣為明
従二位権中納言藤原朝臣為尹
従二位権中納言藤原朝臣為重
従二位権中納言藤原朝臣為遠
従二位権中納言藤原朝臣為忠
従二位権中納言藤原朝臣為明
従二位権中納言藤原朝臣為尹

蟠龍に似たり四時蒼々やしゝ君子の操成殊し霜雪成凌ぐ千葉成
庸とは湖照る朝日かけ松の葉ましに如く屋貧浦ふく風の夕しくれ
秋しらぬ色成間し春に寂こめて朧々たるに沖の船ちいさく夏の月は
涼しれに悠々たるさゞ波の音琴の音初あらしあられふる秋雪ほり
曙みなし松の緒系なる笛しきれど千葉を磨とぞ真精高牛と成その
實を嚼へば長生成得る脂は地中に沈て茯苓と成又龍骨となる青州乃
貢丁固が夏始皇は五太夫に封じ玄牂の保路をしらしむ本朝にも住吉
高砂曾根武隈の名松あるといへども其古松第一にして又第二にならぬ
ものなし如く海靈樹の落にやぶりしと物のみぶりを得るも亦なれ
めでゝ成りたるしにやあらん

懷風藻

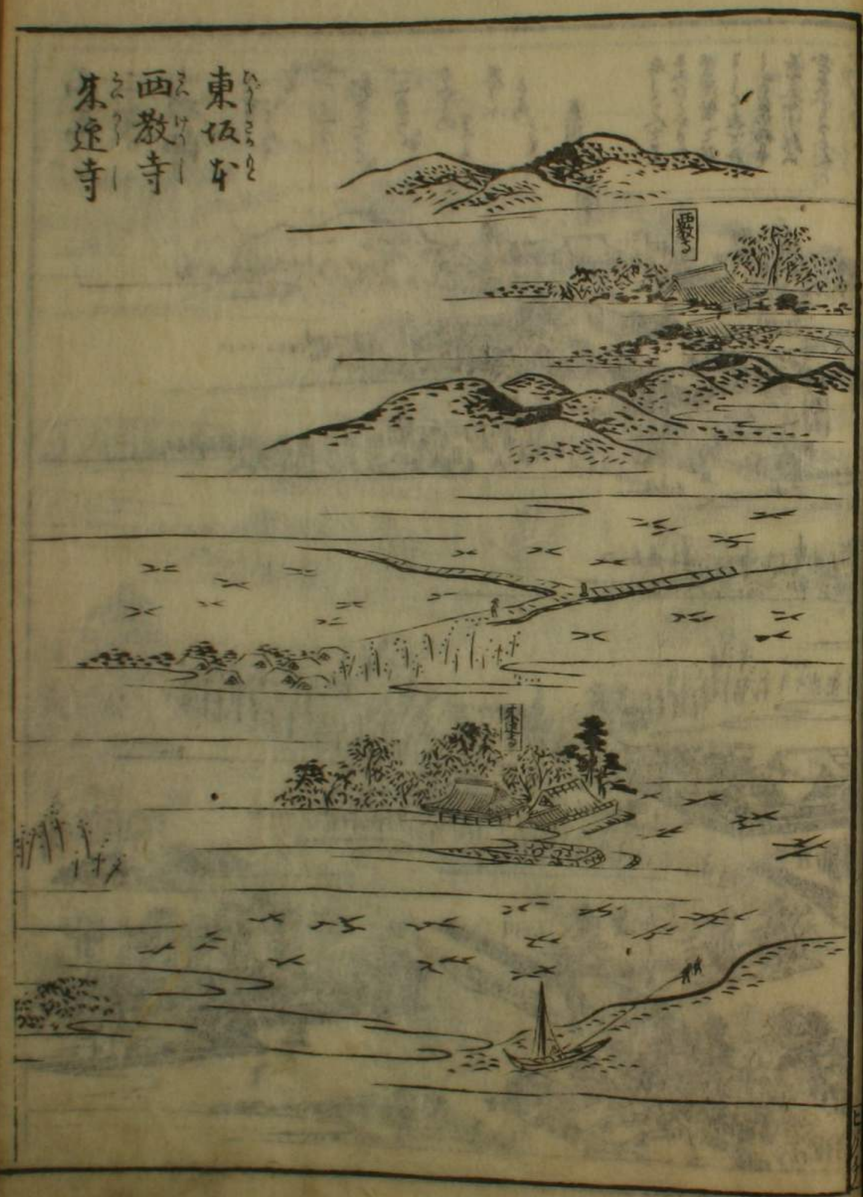
隴上孤松翠凌雲心本明餘根堅厚地
貞質指高天弱枝異高艸茂葉同柱榮
孫楚高貞節隱居脫笠輕

大納言直大二中臣朝臣

内裏清涼殿迄紙形

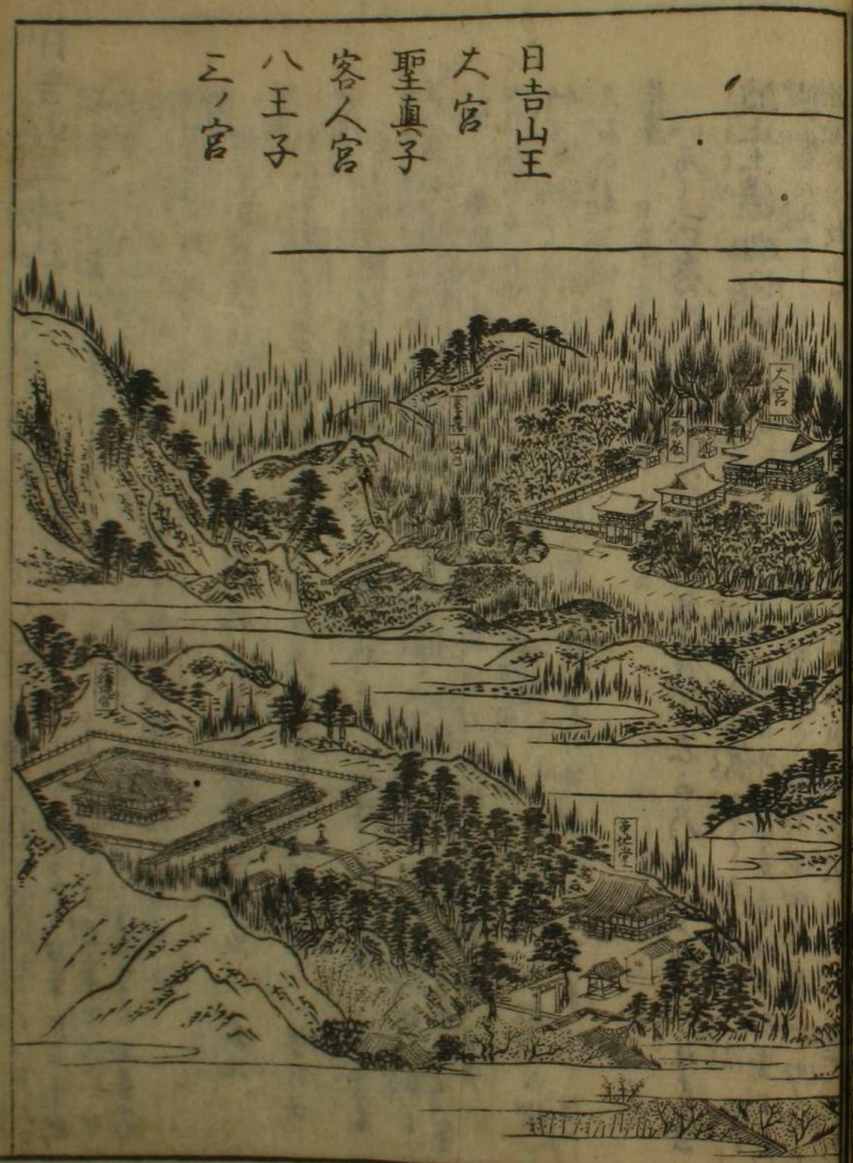
志のの浦や松成あらしの吹しなるさゝ浪とをく氷る水うみ

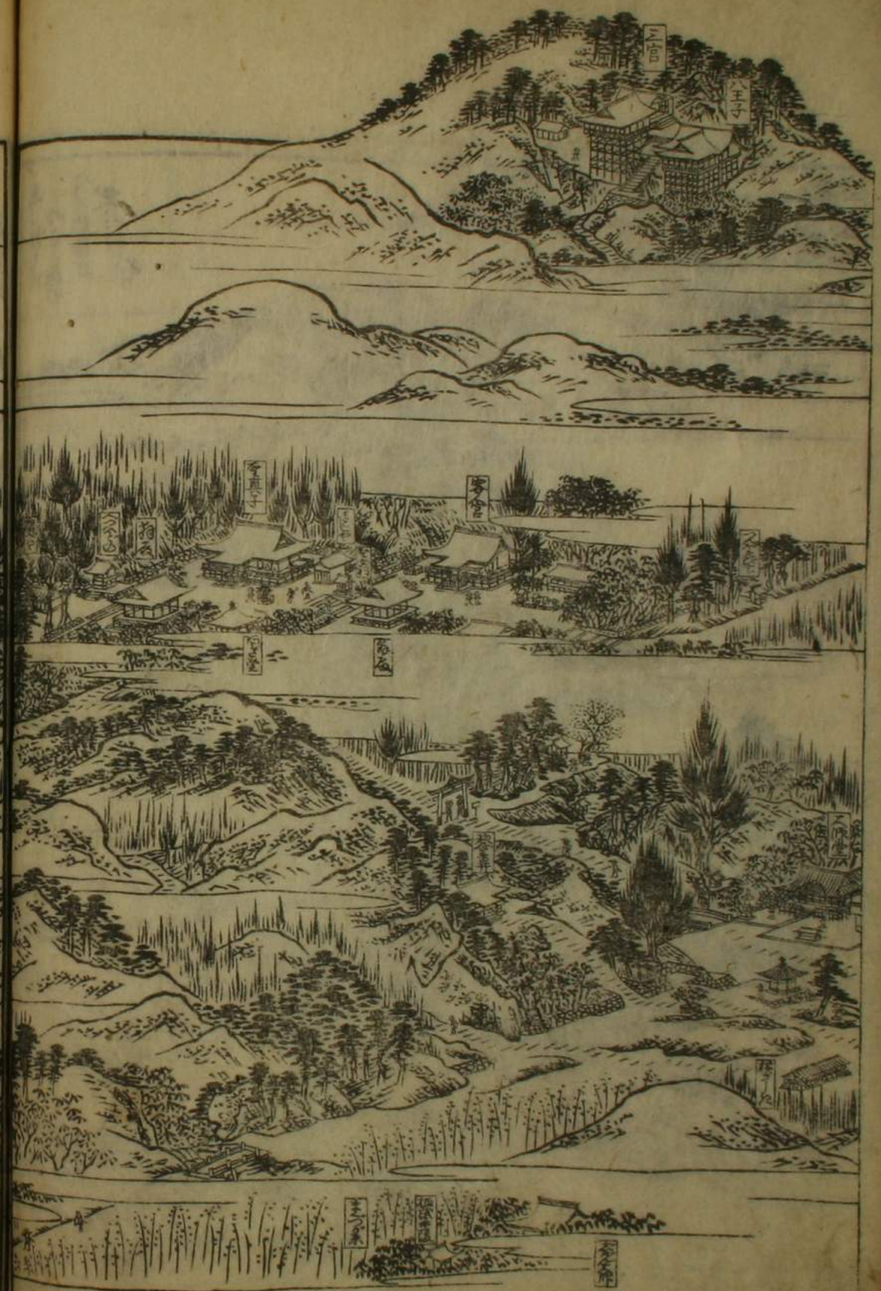
[illegible]



山王
二宮
十禅師

日吉山王
大宮
聖真子
客人宮
八王子
三ノ宮





日吉山王神社　又日枝の稗殿又比殿とも書く古人の假字多し〳〵古事記日本紀萬葉及び旧書に假字多し〳〵えとよみてもよみたれども若事さいふ事ふれて若事さいふ事とよめる事とおもはれて若事とよむ事とす　延喜式神名帳云日吉ノ神ノ社名神又文徳實録三代實録国史等出づ

鎮坐滋賀郡坂本ふもと

世をてあまく日吉社神うるはしみの日をあた　若狭

新拾玉

わひふねのひくちかる日吉の教々ふ七のろ社國をうつ〳〵　行阿

續後撰

行めぐり思ひ日吉の教あまた限もあり〳〵まの道　民部卿

○大宮　又比叡大明神　又山王権現と称す　又大黒天君と名ばく　日枝ノ嶺ニ在ス故ニ名ク　又東照大権現と称す　神代ノ鎮座　天皇御宇

大津宮遷都の後白鳳年中坂本ふもと七社倶ふ本地佛を以て垂迹神と為す　釋迦佛或ハ観世音

竹垣　たかふあり　向ひと称す　大日牟尼尊　天照大神の御佐とぃふ　左右ふ荒王垣あり

續後撰

日吉ふもとてまもる志の神ふ大宮祇

いみ〳〵しの森ぬ林ふ散花の匂ひ成らん　法橋静厳

波止土濃　神名の溪川の流をいふ　水五水活合ふ　五つの色ぬ流る　水活合ふ　川

波の穂ふ立た止りふく土濃あり　権現　真実ふ　無有変易乃

説宮めぐり故ふ此地を波止土濃といふ　生悉有仏性如来常住無有変易乃

志賀の浦ふ波の花乃波そ〳〵そ〳〵　日吉社　参詣のふもろ〳〵

権兵衛稲荷　白河院の御願

春日社　中ふ鳥石あり　大宮の若社奉をいふ

竈殿祠　大宮の東ふあり

哞字門　神路山ふあり　大宮坂路の口ふあり朱ふ柱上ふ哞の字の形あり　神道脇金合鮮を表次悩え猿

祭神国常立尊　小比叡大明神と称す

摩多羅神又金毘羅神あり〳〵　十二神の中ぬ一神として本地如来

攝社　大行事　新行事　猶多

疱井　二宮の傍ふあり　神数大師

疫ふの附玄亀ぬ井〳〵　現ふ〳〵味ふ生輕茶ふ煮ふ可し

○聖真子宮　大宮の東ふあり　又武事元年坂ふ鎮坐

祭神天忍穂耳尊　本地阿弥陀如来

日吉二宮の名句と撰ミ三十六歌仙を画ふて世ふ名ある社頭宮寺ふ補ふあり〳〵

宇成

釜をふた　面ふ　釈迦の月

法師

綿つく　老ひたる　その面

本地堂　本尊河弥陀佛若恵大師の作洛東直指庵の本尊と同作同体ふ

橘樹　二枝神木ふかる山神の紋を表す

杨社　聖女祠ふ神ハ若楽ふ山ふ来現ー中ふ入ふる其家の玄卿尊信ふ篤ー竜殿気比祠共ふ像ふかる

○**客人宮**　聖真子の次ふかる向山明神と称ス

祭神伊弁諾尊　本地十一面観世音北陸の高岑ふる山ふ来現ー中ふ入ふる

景向石　延喜元年六月十八日客人宮延喜元年二月遷ふ時向ー新向ー故ふお尻石ともふ

杨社　釵宮神春祠祇園祠小祠

○**十禅師宮**　二ノ宮日本ふかる延喜二年鎮座

祭神天瓊々杵尊　本地地蔵菩薩

杨社　小禅師祠　四王子祠

法橋惟舟
あとそふて二百とせみ川富士の名
貞室
涼しさの外ふもふれや萩の月
立甫
うれわるな人の上ふ栗のたそふろ
正式
そ月ふてもきりそやそれの夜ふ
梅盛
うぐひすの折そもや茶の煙
常矩
親の枚ふふ
栗や柳麻太
宗因
ふる枚も春ふふ屋ふふ
女そそ笑ふいふた郭ス
雪ふそ
雪ふ
雪ふ
雪ふ

巳上山王二十一社あり本地ハ大楽院
座主慈慶命神託によりて定る所也
迷情の臆說にあらず次日吉山王一實
神道三部即一の義山家によりて
ある是て秘嘆
を知し

○大権現 御宮 真葛原の上にあり

讃佛堂 御宮の中段にあり 本尊薬師如来

金皷 寛永三年丙寅十二月と鐫を 銘文畧に

○桓武天皇御廟 真葛原の東にあり

○慈眼大師廟 締陵下壇の地にあり 南光坊と号 台嶺
戒壇堂の傍にあり

續古 聖真子宮みやくよみてまつりける　権少僧都良仙
やはらぐる光ハへだてあらじかし西の雲井の秋のよの月

同 客人のえにまつりける　法印権救
宮ゐ又光ならくやはらけるか我山の白杉や客乃守る里

續拾 客人の社みやくにて花のちりけるをみてよめる　讀人志らず
いにしへの我法おほへく山桜今もちるらん客と法は

新千 客人の権現を　前大僧正道玄
かつくみかなやみむかしもふりにしをたのまれ初し客乃志るし

續後拾 十禅師によみてまつりける　慈圓
鷲の山有明の月はめぐりきて我立杣のふもとにぞすむ

○十禅社 山王七の御座し給の御神巍然として鎮座まし〳〵中にも
大宮二宮ハ日枝の山嶺に神代より天地至六合の本柱として
天子本命の道場朝歎降伏の神威平天下の御護なる事ハいふにたらず波や
丹穂てる湖に止観をたてし浪の嶽を寄る岸に一念三千の機を照し陽に
向ひ陰にそむけ社頭森々として山のそびえたかく渓の流いさぎよく
神祠くのたゝずまひ他に異なりしかば一社玲瓏たり實に神秀の氣はれ
あがれる新淡海一州の畫窟之一蔓なる田ごとの山隠擔笠を來ぬけてやしろ
くをめぐり大廻の阿闍梨ハ洛中の神社までも巡拝して四方の人々
に結縁し日毎に多くの道俗又苦行し専ら尊くありがたくぞ
おぼへ侍る抑神代なる人の心すなほに清浄にして正直を本とせしが次人に
を徳くの罪咎なし此神の末にいたりて萬民黒きこゝろに深く根の
國にも隣りて因茲神と現じ仏と顯じ三千界裡ミな和光の塵を同じし

両部習合しかへも赤尊しむかしより本地を佛とし垂跡を神とさだむる浮屠氏のならひ願くハ本地を神とし垂跡を佛とせば我神國の本柱の動ざる驗なるべし

日吉神詠告傳教大師　羅山子神社考出
波毋耶麻夜於比磨乃寸幾乃比登里伊波
阿良之毛左牟志登布比登茂奈志

新古
ちかひありやくもの子日れ野小松おひん我まそさらゆへしとは　僧正實因
　山おハ日吉社司社次のうしろの山たまうらくく子日しそ作り々秋人の菱小みへけると成ん

拾遺
祢らこかなる日吉の社此木綿たにさ菱のうれそもとやめてうるを　従部成家

新後撰
あひふ乃ひろく日吉の宿そさやのなる七の星乃照要光平　法橋善覺
　日吉五十宮の右まつりけつ平五

玉葉
うれしそく法のをしへを守るとくぬりとふやそる神ところそきけ　前大僧正慈円
　進膳のちてろを

新古
我身のむ七の社乃ゆふたまたかけても六の道にかへされ　全

同
わ縁人のねえひとミ河の演風ふ心涼しき志その君こるか

○真葛原　三津ハ戸津志津今津之皆坂本ふあり
　権現山の下横馬場さして慈鎮和尚の別院あり　旧跡之洛東の真葛原ハ慈鎮吉水ふ住せうるまての號ゟ後世號あるべし

拾玉
我恋ハ松をしぐれのそめかねて眞葛が原に風さわぐなり　慈円

○四ツ屋若宮　下坂本四ツ谷町ふあり　大將軍を祀る
○登町若宮　下坂本西側ふあり　客人宮の二の鉾也
○奥成宮　下坂本多わろ町ふあり　神躰道祖神
○比叡辻　下坂本の北の端ふあり
○石占井　上坂本岩神町ふあり　昭神足を洗ふ井也
○大鳥居　来ホ社馬場先ふあり　太神門といふ
○妙見祠　生源寺の後ふあり　傳教大師の母このみ　妙徳まんとして祀るなり
○三津百枝祠　八条の上ふあり　大師の父君を祀る
○和產和汗塚　馬場先南側ふあり
○大政所宿院　傳云此塚ハ大師出誕の時　胞の緒を収し所也
　馬場より左町中ふあり五間每歳四月中未日の神事初ニ神輿入御京師室町法王社より西田楽法師泳来て舞なり神供と初めて献上しもとひ内の馬場より神輿此社へ入て大宮

○南若宮　社と同所ふあり　客人宮の一鉾也八王子の一鉾ありしら
○同社　同所ふあり　治伯神也
○磯成宮　同冨嵜町ふあり　天照太神をまつる
○若宮　比叡辻ふあり　祭神二ノ宮一鉾
○同祠　石占井の傍ふあり又社の後ふ　盤石あり
○生源寺　馬場の北側ふあり本堂ふ千手觀音　傳教大師出誕の地なり　產湯池寺内ふあり　產湯の釜此跡へ　瓢箪圖子ふあり
○大將軍祠　生源寺の上ふあり祭神大山祇命　傳教大師の生土神也
○小五月會岡　馬場北側ふあり弘仁十年五月五日ふ神輿をわたして　神事を行へ又競馬あり
○歡喜石　近年中絶ふ達せ　又荒神岩ともいふ　馬場北ふあり

のお殿（遷幸～七社を合せ祭る
あれば宵宮祭～という）

○王子宮　大政所のあふあり
祭神は一王子なり

○冨石　王子宮のあふあり
東北大悪天

○彼岸所　悪覚大師の御房之

○早尾祠　早尾坂あふあり尾を尾とよむ
東北筏田村倉

○走井宮　延喜式ふあり東北
瀬織津姫命　本地弁天

○塔下惣社　彼土土農ふあり日本大小神祇を平将門調伏の時ここへ招く祈願

○八柳　下坂本の渡ふあり権現初て出船の時
大津八柳一ヶ所に御船を繋ぐ

舟よせ～海上の御幸ふあり～さんのむ～と祢やちひめ～ん　乳母伝説

○榊宮　源賀院の門内あふあり

○滋賀院　馬場の南ふあり坂本御殿と称ス

○神路山　大宮ゟ二宮との杜なり

○稲子宮　猿楽祭礼として

○猿塚　唵字ある石のあふあり供養の猿屠ほふりこゝに埋む塚あり一圓ニ

○地蔵堂　早尾社の下ふあり
傳教大師自作の石地蔵安ス

○走井大師堂　早尾坂小側ふあり
元三大師を安ス

走井宮の祭礼は
七社下七社合て山王廿一社ゟ～小社八十七社本郷て一百八社ん

公事根源ふ云日吉ふ中申日神輿ふ洛西松尾の社と同神あ～て大ふ
吹神あり　後朱雀帝長久四年六月八日ふそ光く廿二社の間ふくゆる後三条院
御宇延久元年四月廿二日ふ参ふそらふ云日若社傍ふ老ゝふ白風二年
天武天皇昇位二年ゝ社傍あゝ　上巳日ふ大津宮八柳浦ふ山王神幸あるゝ所ふ
湖上ふ二艘の漁舟あり老人ふ田中恒世を人ふ天晴光との給ふ其時山王権現
示～て曰汝等つゝしふ祝奉嵩松の下ふ誘ふ給へ～二人の若宮ふ祝奉則漁舟ふ
漕つゝく神幸～ゐる之山王伯ふ曰我ふ齊忌の神供をべ～恒世對ゝ云
漁舟ふ棹ふ好おふ～茶湯の小筍の中ふ栗飯あり汚穢あらば神供ふ献を
べ～とゝく覆盆子の葉ふ盛くちひ～ゝ伏倚ふ山王喜悦斜あらば恒世昇
栗飯の神供懇ふ思ふ海智子孫永く到る権現ふ示～ゝ曰汝船の神遊び
おさの栗飯を神供をべ～と云終ゝく神路山波止土濃の四ゝ～遷幸～
ゐふ是ゟ神ふ恒例ゝ～ゝ古實をふ～先ゝ申のお未乃日ゐる

八王子三宮二社の神輿と八王子山の石殿より落ち給ふ神輿昇救十人宛
みくうけ先坂祇祠に趨つてまもる勢ひ猛みゝしく死生分離あんとを神輿落し
とゝへやれそう大政所ふ二宮十禅師八王子三宮の四つの神輿を遷し西乃
刻ふ京師よりの神供を献る晩ふ入ゝく獅子舞田楽あり初更の比ふ相圖
あるゝ四社の神輿の轝を一度ふ落し一乱を一散ふお渡を拳ゝく走供
あれ仮又宵宮落しとゝへ嵐洞のおみゝくお渡の勝負を極め大宮若殿
ふ入まる申の當日ふ山門の大衆ふ擁護輔に羅を坂なの衆徒公人ら
甲冑仮猶ひく社頭へ切烈に其時大ふ猛威を震ひ神武若人の非礼仮
礼を紊るふあれむし一官幣の勅使朱輿の遺風と右ふる模安のみゝく獅子
舞田楽あり榊ゝ神主代の児恒世奉子鬼会餓子ふ束帯みゝく大津
馬場村より出る七社の神輿ふ申の刻ふ神なあり惣合ゝふ趨る拳矢の
如し漸石を居みゝくお渡の勝負を極む神輿ふあれも飛ぶがくふ走ゝく
八ツ柳の渡ふ到る諸人あれと見んとゝく楼閣を接く田園の畔を走ゝ又腰
刀をつゞけ飯匂仮擔ゝく走るもあり
へ八ツ柳より奉船あゝく幸嵜御旅所ふ到ゝあゝく恒例の神供仮献る
祭式畢ゝ又漕度し比叡辻の若宮ノ渡ふ着岸ゆて本社へ渠宮ふ
きるあれをおまんとゝく遠近の貴賤馬場ふ群集を茶店ふ多く宴を双く供
訪と設けあんふ店仮出ゝく棹々を費ゝ酒賣粥賣粉賣ゝ豆落し水
嚢入辻的ふ礼切烈の吹笑へ群集の中を賣あゝく旅舎の洵人へ旋安乃
狹き仮恨と笠を脱ぐる者へ経言園の指仮蒙傅云山王ふへ故實あゝかし
多くゝて拝二月中申日より始り辺郷辺立辺辺七浦みふ礼ふ祀ふ頓る競ふ
七年観ぶれをとゝくゝ見はゝゝ一年業果ゝ久遠ふ及ぐとひゝゝ
加行の古實今の世まで残まる祭祀稀ゆれいる王遠境の人も生涯一度い
観ぞんをあゞゝゞみふれ治平安民の行事ゝ
千載つ
永うのび日吉の新ふ奥山の栄れ戸まそもゝくさゝめやら
拾五
ゆゝとふ賀茂と日吉とあゝひ若同ゝ卯月の神をそそる

山王系ハ卯月中ノ申日
ゆゑく坂本法師ニ人ながら
古実公紀し馬場通の
り烈荘観ことごとく
圖をる事
統ハ此さく
ゆゑ僅十ゟ
一とあらハ
のこ

比叡山

城江二州ニ跨ル日枝又禪叡又天台山又台嶺又比嶽又北嶺又都富士とも称ス和哥ニハ我立杣と称ス

神社考云

伊弉諾伊弉冊立于天浮橋上以天瓊矛探滄海其矛鋒滴潮凝爲一島名曰磤馭盧嶋是日枝山也

諸社根元記云

平安の帝都ハ天上の名流とあらはせば國ゆり良ヨ あこ ゆるく日得といふ山あり日此神の御光成祢ぐくともその光成得ゞる所成諸神あまつ成祢ゆるく日得の山と名ばく

懷風藻云

和下藤江守詠禪叡山先考之舊禪處栟樹之作上

○近江惟帝里禪叡寔神山山靜俗塵寂谷閒眞理等於穆我先考獨悟闡芳緣寶殿臨空構梵鐘入風傳烟雲万古色松柏九冬專

○日月荏苒去慈範獨依依寂寞精禪處俄爲積州墀古樹三秋落寒草九月衰唯餘兩楊樹孝鳥朝夕悲

此二首の詩ハ天平勝宝三年十一月淡海三船の撰まれし懷風藻ニ出たり傳教大師より已来ニ宮舍ある事其證あり延暦寺根本中堂ハ延暦年中傳教大師の建立其外三塔及び横川飯室西勅寺等ハ世々の高僧造立之都名所圖會に見へたれバ此ニ略に

拾玉

叡山ハ花の都ゆうしきたるに鬼ぬる門をぬさくとそきく

義鎮

比叡山

四明嶽

四明嶽上路乱龍
丹鳳城辺瑞靄濃
千里凜然千里雪
青天濯出玉芙蓉

秋 蘿蔦

浮御堂

比良

堅田浦

四明嶽 比叡山の絶頂に山王社より坐まで十町許に花摘社あり其ハ傳教大師の所母堂妙徳夫人を祭る卯月八日花摘の日ハ女人を許して此社にて浴を浴し其れより中堂まで二十町四明嶽ハ中堂より八町許に石標あり其れより東南の方へ坐る事八町嶽に大岩三ツ石佛十躰斗あれ日枝の頂上に樹木一株もなし根笹のミ發てるがゆゑ其ハ云霧木往して風烈し頂上より東の方へ二四町りて凹なる所あり是山城近江の幽境にあらず五町斗ゆけて智證大師の廟塔あり四方石の玉垣ありて嶽を之是より道廣くして三町そうゆけて益勿寺と中堂の中間往還道へ出なり

夫四明嶽ハ山州第一の高嶺にして山水清暉を含千里に同を極むまり西南にハ帝城の巍然たる粧ひ鴨川大井の二流愛宕高雄の連峯雲端にハ淀川の流れ長し遠く眺ひてせば難波津の金城其西にハ滄海洋々として帆かけ船ハ毘虫の蠢に似たり東南の眼下にハ唐嵜の孤松大津浦粟津の城勢多の長橋小の方ハ琵琶湖の樂々波悠々として山水の美しきにとゞまる邈に三上の翠巒比良膽吹の雙峰黛色添く湖上にハ沖の鳩竹生島も浴の上にちいさく今津海津の高船山田矢橋のつゝし舟ハ水雲に中に鮮に會稽山の記に四明の高嶺雲に敷きと書しも同日の論此峰も四方明なれど四明の名あり秋の日雲消し天外蒼々たる時にハ駿河乃冨士山此峯より見ゆる百冨士といふ書に京師の愛宕山より冨士峯見ゆるの圖あり日枝の山におよびとしにておさく鮮なるに此良嶽ハ眼下に大抵二十里の湖水乃低を添く其より東の方に英尾三遠四州の間に高山なし遠の秋葉ハ長嶺にして高峯にあらず蒼天にあらず見ゆるといふ事疑あるべからず傳聞元弘建武の乱にハ此山に皇居ありて講堂の洪鐘に捧事度々元亀にハ信長の暴逆時世ハ変れども煙霞ハ変らず人物ハ改れども風流改らず抑駿の冨士ハ三國の名山なれども頂嶺に登る時ハ朦朧として雲を歩ミ雲に入るがゆゑ湖東北の方海陸のつゝしんありて只旭の出るに於ける外なし我立松ハ帝都の繁花琵琶湖乃八京みな月中の客となりて城江二州の絶勝たるべし良嶽といふハ良ハ根にして堅し又卦の名に丑寅の方則一陽來復の後丑ハ繋寅ハ演て東方孟陬の辰なり故に王城の鬼門を護て悪魔に秘ふとハ此

謂之世俗鬼門柱といふ比叡山良嶽をいふ

成学山西教寺　坂本八丁目にあり天台律宗の本寺

本尊阿弥陀佛　丈六、唐の鞨摩仏、開基慧亡慈恵大師
念仏三昧道場

紫雲山来迎寺　下坂本比叡辻村にあり天台律宗の本寺
念仏三昧道場

本尊弥陀釋迦薬師三尊　開基恵心僧都の像を安ず

苗秧明神　苗秧村にあり延喜式云那波加神社
例祭四月中酉日山地の生土神

祭神天太玉命　山神光翁と化して鹿に騎せ出現し天智天皇
七年に造立苗秧の神主に託宣の事菅家傳記にあり

堅田浦　志賀郡にあり大津より三里
領主堀田侯居る湖水の船着

ふりひさをふるあまのうらうらの浦のあまれうけ繩　筑都成賢

新十　春のうらうらの浦は鈎ゆるやかなるめもたゆく波立ぬ小　川光院入道
前大納言

新拾　なのそこそこそこ浦の沖は波立名にうらや契ありけん　道晩法師

新後古　さ波やよるもちどり成ふりあふうらのあまれ枩ぬ　前大僧正
後拾　徒ふえうらなたらん名やたらん堅田の浦のあま活　宗祇

堅田　落鴈　鴻一鴈幾行更不孤暁風帯月落東湖二
近江八景之詩者　相國寺林長老　裏一沙背水堅田一浦猶見孔明八陣圖
京都　近衛関白時熙公

浮御堂　志賀郡堅田にあり宗旨禅宗海門山満月寺と号ス
糸師案聖大徳寺に属ス

本尊阿弥陀佛　左右に化仏一千躰を安ス　鎮者堂　聖徳太子作俗の観者なり安ス
弘法大師の把し石地蔵菩薩安ス　恵心僧都の像を安ス
僧都の開基ス茅葺の草堂なり　一條院作宇榎門の額信
光明縁を傍に云むり深信僧都　御上洛眺望ス
御上洛の時殺生禁断の為に湖上八丁四方に杭を打ス
湖上に網を入ざるの山魚なり　湖上ス眺望ス
湖上に網を入ざるの漁人多し　其雛殺生供養のため金仏
其雛殺生供養のため金仏　一千躰を安ス
一千躰を安ス　櫻町院詔を下し再興に及ぶ又其跡を
再興に及ぶ又其跡を　五十年忌の作善として今の作堂と
五十年忌の作善として　今の作堂となる
三日の名法会あり　堅田浮御堂殿ともいふ

近郷群集ス

勾當内侍古蹟　今堅田の田地中に塚あり毎年九月八日夜ふけ参詣
つゝむ今に名のみ残れり　仏内侍と頭太史行房の娘

左中将義貞ふる名ども東のみの中ゐ
わら社のふもとふやうる新おとゐ
と源くつうへ〳〵なれて君きこしめして義貞
ろうんにくさんごの樹ゐ陽ふの
驛山花濃く　左中将坂なうら小國へ
仙門待こゑ今堅田しておゐそ留
対旦やと守く夏うりへの海うゐ
陽しも藤やうべそれうら都へやう製
岩嶺の往生院ふ入おうるとげ
られ〳〵幸一太平記ふえくうら

大佛櫻　堅田うらあの方五六町山際田圃の中小塚あるく真上ゐ櫻ある
大佛黒生の右ゐうそみづうら柿垂のひしとそ拝あるべ

真野入江　堅田の小ゐおうら真野村真野川ある
浦淡ゐやを古領多〳〵

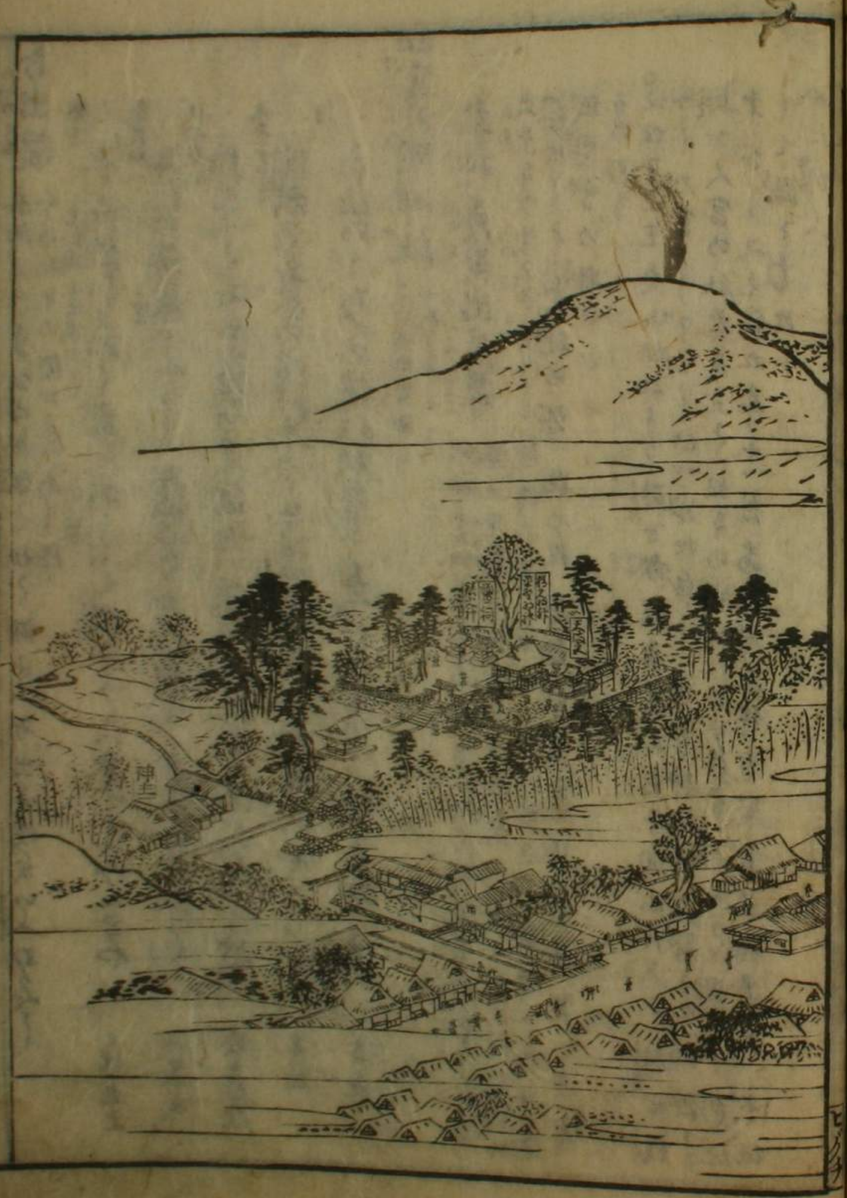
鶴るくはのく入江れ漁風ゐおゐ花波る秋のゆふれ
後撰拾吹おろしをの嵐や寒かうんまのく浦人衣うれあう
續古秋半ふ吹漁風をまのく浦れ入江のふうう今を明る多
新後撰玄北の浦よゐこれうう若えく入江の波小月をそゐけさ
續千冬うしのおゐをゐるゐもうる若ゐ入江も氷るまのく浦風
新拾遺祇女のほむをれ風のかとうゐ秋とそうるまのく浦活

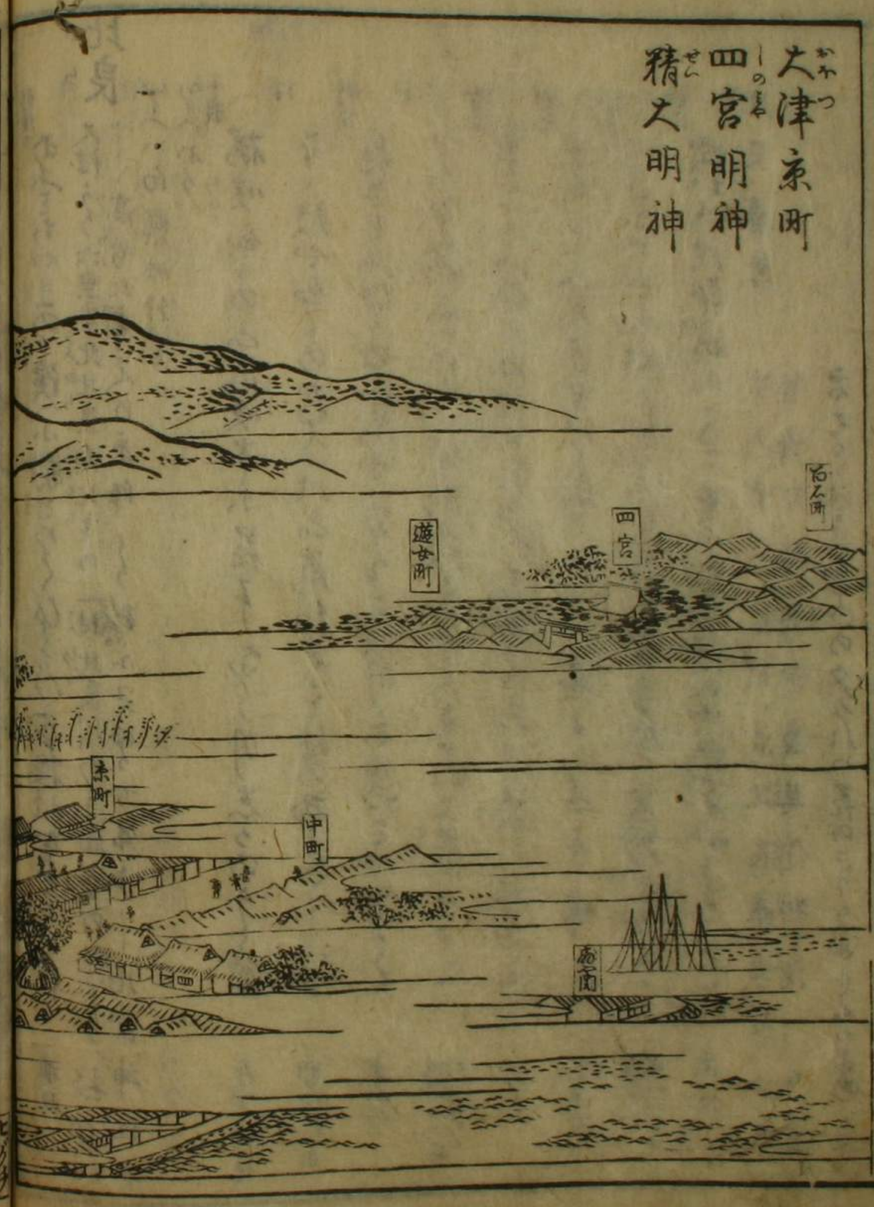
源俊頼朝臣　續古今歌院下野　真昭法師　法眼源基　後京極摂政

比良　大はうら六里ゐ北比良南比良の二村すく高嶺た若え比良川あり初冬のほうら古領多〳〵比良神社と
新後撰おゐをちやまのく漁ふ駒とめくひ
いふい向緑吹おろ
千載横吹をのふ風吹ちふ花手ありり志うのう波
日さく波やをくの高つれ山風紅葉を海のおとゐ〳〵つる
新古花さそふひくの山風吹ゐうこれり寒のゐをゆるまく
日をくみやちうのう傾風さくひくのうれゐ義ふるく
續古雲そくひく山風ゐ月さくく氷るまのく浦ゐを
新拾吹りて山風さくて波のひくれ湊そゐ帰く
新後撰古氷ふまて山水ゐむをうひと法ゐのう程い客活ゐ久
詠川吹おろしひくのうきいをそれて日次の行ねでそや屋まくし
比良暮雪　吹テ入レ雲ニ乍ラ飛ビ入レ波ニ比良ノ嶺ノ雪暮ノ江寒シ
輕キ舟短キ棹與ニ何ゾ盡ン漠々一様ノ看
ル可キ比良ノ幸ひそれ風の吹ゐうゐ

損政　基綱生　神社と　作道中納言朝　刑部卿藤原　文内　伝従二位為人遠　経信　宗尊親王　後京極摂政良経　国信　後京極摂政

大津京町
四宮明神
猪大明神





打出濱

京師より壹拾弐里餘海邊に出る初メハ芦原ニて次ニ松原ニ成ル初ハ湖水ニて打出る濱ニ成ル

今の松なの濱口あり上下界

彩千

さゞ波ひまわく岸ふあふくと

後浪拾

み日の海ふ永とふ〳〵白波の打出濱ニ

動拾首

駒をはくませ打出の濱を見渡せば

支本

関越くて打出の濱れ志のうら波

落相

名所ハ多くハ地主神ニ因ミ名ヲ付ル例ニて此濱モ其例ニ洩ス

濱名跡院

白浜のうちその濱れ秋景ふ多くにおおりて鳴る雁を聴

四宮大明神社

大津四宮町

祭神 表炎出見尊

地神 当四ノ宮ノ地主神

大国主命 右ニ同

神輿二基 舁山十四 人形及ビ飾物ヲ備テ遷ス

太祖ニ当ル生土老翁三座ヲ祀ル例ニて九月十日大津濱辺の祇園舎の祭礼ニ花の御猴ニ従ヒ渡御ス

○又坂本山王祭礼ニハ当社ヨリ榊ヲ献ズル例ニて毎歳二月下旬ニ入ル榊ヲ伐リ出シ申ノ日神輿ヲ舁出シ大宮ノ社前ニ立ツ坂本の宮仕へ二人供奉ス当社司人体重堅古語拾遺ヲ読ム

精大明神社

大津松本ニあり初メハ近江国志賀郡ニ在リ天智天皇ノ御宇兼元年中ニ此地ニ遷ス

祭神

穂田彦命

相殿仁徳天皇

世々跡勲の家ニて当社ハ大明神ハ跳鞠の祖神ニ坐ス

須嶺々ゝ旧地と云ヒ元宮と称シ麓ニ恭敬ス

平安ノ頃ヨリ跳鞠ノ家ニ伝ハル古流ニ従ヒ今ニ至ル

鎮火神 愛宕 恵世神 これハ池田家の祖神ニて

旧記曰吉ゐあり故ニ山王ニ祭ル神主代々ニて児出ル

の生土神ニて御祭四月初日ニ当ル

菊ヶ濱

松なの國司大伴の翁と云ル人此濱ニ菊多ク故ニ菊の濱ト名ケ

新千載のそゝら波の和布を干出の濱の下ニ出ちりみ山所を

の名と貢まりしと今ニ尾伴

大堂會稽惠貢

丹州桑田郡江刕志賀郡山ノ者ニ開上ニ住ス

松本渡口

関東上下の送ひ多く此所ニ着ス

右ニ二上濱山坂のうち八幡安食の松原北良の渡也

日枕流の渡志賀郡ニ在リ

双ぶ方かし

やそ多ゐ濱よ松ニ春の風

太祇

義仲寺

芭蕉塚

松本渡口場

義仲寺 馬場村にあり此所本曾義仲戦死の地之佛堂に牌あり
又家臣兼平の牌も安に

義仲墳 堂前にあり或ハ記云天文廿二年近江國司佐々木高頼石山寺
手諸の御るさ此古墳を掘し源家ノ大將軍の古跡守戸なく
ていあるくらにとく一宇を建て含田を附し堂ぢを付らる初メは
石山の末院たりしか今ハ寺門に属に

本曾義仲姓ハ源氏六條判官爲義の孫帯刀先生義賢の子之 義賢ハ久寿二年
八月武州に於て悪源太義平の三茶にて孤と成乳夫の家に依て信州岐岨
の山中に蟄に長成に逮んで英雄勇武に起たり本曾冠者と號次頼朝を
豆州より義兵を擧げに及んで義仲も亦兵を發し信州を平げ上野に
越さ越後に入って城長民を戮し威を小國に震ふ京都より平經盛兵
十万を帥て攻戦ハ義仲ハ羽丹生の八幡宮に於て太夫坊覚明に願書
を書せて収め砥浪倶利迦羅を急に攻落しかれハ平軍死る者七万餘人
義仲猜に乗て都に攻寄る平家ハ幼主を護ありて西海に趨る義仲
権を震ひ左馬頭に任ぜられて越後國を賜ひ朝日將軍と名乗は
院宣を下されしかいまだ幾ならずして驕奢日々に長じ公卿が闕官

し土民を流毒し上皇を逐内裏を焚暴逆多かりしかぞ鎌倉より
範頼義經討ひとして若望せられ宇治勢多をさへて戦ひしか義仲乃
軍敗し勢田を堅し兼平に打出演そりあひ殘兵を聚て又戦ひしが遂に
主從二騎に討なされ粟津原の源田に馬を乗入猶豫とこ後に石田小太郎
爲久が矢に中て戦死しぬ事ハ平家物語に見へたり

○芭蕉翁墳 義仲寺境内義仲塚に隣る又茅室にはきを翁の本縁を安次
天下蕉門俳諧の祖たり
枯尾花出辞世 旅に病て夢は枯野を かけ廻る

此翁終焉の事ハ枯尾花の序に委し 是其角が撰之其大意ハ一茅蕉翁
西國の脚に遊んとて大坂に下り船場御堂前花屋が家に旅寝
して前夜と病て終に去ぬ元祿七年甲戌十月十二日
年五十一門人其角丈艸正秀去來と初メ十案斗發波より棺を
擔て去て蕉を是兼くの遺詞人
○近年寒暑十年の後京師下岡崎五升店燦爽四方の俳士に觀て此
茅室を創し堂内に蕉翁の門下三十六人の秀句を聚めて其門
女子の血脈の案孫女の胤と云ふ事にかくしめ四方にかく
○什寶に蕉翁の枝の杖筆の物かたくあり これを藏むる也 其後
粟津文庫といふ近年此真蹟集を板しく世にもいふ
義仲寺主翁が蕉かくなれたりけれ 笠にかく寿や枯尾花 其角

志賀の花 湖の水 堅田 素堂

○芭蕉堂の澤ゐ無名庵と云ふ東西ゆきゝの間ひろふ止宿し
ける事多し〳〵寛保の比尾州雲理房石山の奥國分と云ふ所の
古跡ゐあり〳〵椎の木をも探きふりし庵を幻住庵と額とうち
なりあり

○義仲寺の二町許南小圍山と云ふ所に庵ゐ結んで芭蕉の上足丈州ゐ
住ゐ幻庵と号し〳〵閑居の地名ゐ龍國と改め丈州ゐ原尾州ゑ
ありし出家〳〵禅宗と成りの比雅ゐ東〳〵と云ふ所に遷ゐ
の毛めと隣く秀句多し〳〵 大原や蝶の出ばかりなる 丈州

脇所 城あり 本田侯領ぜう府也 西の口船町をうく 宮ノお町の右ゐ八大龍王の
祠あり 凡糸の如門うち五ケ在あり 城下の町根て九に町く
糸ゐ五月六日ゑ九ゐ泉水るあり中大ゑふ脇所の社あり九の宮と云ふ
追ゐ九ゐ八大龍神の社あり九の宮ノお町の右ゐ八大龍王の祠あり中大ゑふ脇所の社あり九の宮と云ふ
陽炎ほの水 為孫君と詠る田畑の社あり九の宮と云ふ
宮町ゐ多宮八幡宮新羅明神の社あり中ノ庄ふ斗頭天王牛頭天王祠あり
棲ゐ〳〵 國分の住居ゐ曲翠と云ふ
居ゐかうし〳〵古跡又茶所堂あり國分寺と云ふ

脇所ゑ原栗津迄脇濱あり
例年の如七日の間ゑ所の頭人の家ふ猿の紋ゐ幕を張ゆきゝの者ゑひ

湖水交易の船着みかも九仁成
とゝ云ふ成十分一と云ふ仁起を其ゐ為ゐ應〳〵寶銭をとう神供料
名成迫江栗津佐森陽炎とう二人乃総甲あり
山湖ゑ原ふむ〳〵山湖ゑ二人乃総甲あり
あり〳〵が鎌倉頼朝卿の台令らして迫江國二十四左所ゑかめあ人のま配そ
九十九浦の初穂十分一ゑ迫江佐栗津恒世ゐ支配と云ふ
ゐ〳〵年あり又松平若州神のま社ふ脇所ゑ恒世ゐ支配と云ふ 按ゐ日吉の社記ふ恒世が
又脇所ふ陽炎のほれあり比叡ろゑの石山寺と爭ひ〳〵山社の神職ゐ〳〵比叡
名成ころく他ろうものあ〳〵も古ゑ所に居住ず〳〵 慈平の福曲に繁ばの愛や
らひ栗飯の神供を餉て船下ゑ申の条日ゑ綱船二艘ふ樓成ろ川
若樂成奏〳〵く城ゐ成めぐる船の中ゑ猴の面ゐ被り毛衣を着ま子
七人あり笠れより磔づくひふ大ほ〳〵漕り頭主ようふ警固和も供ゑ漕
連ご陸地往来の者ゑ八旅人ふど笠を被かう〳〵ゐれを観ま虚統を歩て
知仁衛年の判ふ庵を修ふ到を沖ふ泛く神輿をまいぐゐれを脇所の神供と云ふ
年尊の下に及へう

粟津松原

木曽四天王
随一之軍将
今井四郎兼平
粟津原血戦

春泉画

兼平憤 粟津松原より西北へ八町三町田圃の中ふ石塔あり
高四尺許 今井四郎兼平と稱ば
東鑑曰
壽永三年正月廿一日蒲冠者範頼源九郎義經
等爲ニ武衛御使一卒ニ數萬騎一入ニ洛是レ爲ニ追ニ罰義仲一
也今日軼頼自ニ勢多一參洛義經入ニ自ニ宇治路一木
曽以テ三郎先生義廣今井四郎兼平已下軍士
等於テ彼ノ兩道一雖ニ防戰一皆以テ敗北蒲冠者源九郎
相ニ具ス河越太郎重頼同小太郎重房佐々木四
郎高綱畠山次郎重忠澁谷庄司重國梶原源
太景季等一馳ニ參シ六條殿ニ一奉ニ警衛一仙洞ニ此間タ一条
次郎忠頼已下勇士競ニ走テ一于諸方一遂ニ於近江國
粟津邊一令ニ相摸國住人石田次郎ニ誅ス義仲兼
平其外錦織判官等者逐電云云
今井四郎兼平 姓ハ中原信州の產兼遠が子ニ義仲信州ふ流落の時兼遠
極意して忠肝義膽を專とし
しく勇威を奮ひ義仲遠勅ふよりて
洛ふ入ん攻戰の度ふ義仲の陣敗亡勞田の橋を固し兼平が先生を和らん爲
あに兼平も亦味方の存亡を守んとて勞田ふ棄てふゝまさゝ主君ふ謁へ
且喜び且哭く散兵の殘屬殘ハ半巖上の電のゆし終ふ敗走して義仲し

粟津野 又粟は小粒又粟はの赤の古語多し 東鑑
その粒号之今ハ御遷そしゝと粟はのねそしゝてふるべし 後拾
おそはのくそろの落つのくみそ立河む駒そいさ先る 後千
ゆくゝ衣よめれく落雷のあり河の小聖ふ落か掛そん 新續古
おそ河北の葛北を急そその場るまそ背やそ河ゝさ落の命ハ 新拾
あゝ坂のあれ称をそく成ふゝう新落るあり河の東 新拾玉
粟津のおそハ風ふ靡ゆそ見てる落を堂之ゝう 慈四
粟津杜 腸所の臓ふ腸所ぬ社の杜をてふるべし 後拾
粟はの汚水ハ陽そのふ水ふてふ名
閑ふさくあり河の杜乃あゝ 後拾
粟津里 いれも城下ふあゝさ落 五ノ
おそ河ふりくようねかくふ上果
東海の要ちれまその落志けきりもとまるも社そ志ふく 新勅
東海の要ちれまその落志けきりもとまるも社そ志ふく 續古
閑のあゝ衣そふ次やさ波のあそ河の里ふ夜う河之 後拾

戦死しゐへど兼平も防戦の術盡く太刀の切先を口に含ミ馬より逆に墮てく
自戮に禮記に曰人の臣としては其身を殺して忠成家に左傳にも忠を
人の望んとぞ宋の文天祥は忠に死しまく顔色変せに韓成は身を殺し
て忠を屬む遂に祠を康山に建るまゝにも其忠死を賞じてく祠廟に
建て後世英名に賞せざる事豈遺恨ならずや

東海道名所圖會卷之一　畢

光映文庫